

地理的見方・考え方、地理的技能を育成する社会科地理授業
のための学習指導システム

—世界イメージ形成のための方策から—

2002年

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

教科教育実践学専攻社会系教育

(上越教育大学)

吉田 剛

<本研究の章構成および目次>

第1章	序論	1
第1節	問題の所在	1
第2節	研究の目的と手順	3
註	—第1章—	6
第2章	地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業 のための学習指導システムの開発	8
第1節	地理的見方・考え方の構造化	8
1	地理的見方・考え方の「地理的…」	8
2	地理的見方・考え方の内容構成と構造化	9
3	「地理的…」諸概念との構造化	11
4	社会認識および公民的資質への構造化	12
第2節	「地理的見方・考え方の学習指導システム」のフレームと活用	14
第3節	授業づくり—高等学校地理「アメリカの五大湖南岸工業地域と 自動車産業および酸性雨問題」—	16
第4節	まとめ	23
註	—第2章—	23
第3章	地理的技能の育成を重視した社会科地理授業 のための学習指導システムの開発	26
第1節	地理的技能の育成を重視した学習指導システム	27
1	学習指導システムづくり	27
2	「地理的技能の学習指導システム」の検討 —文部省資料中学校社会科学学習指導計画の分析を通して—	29
第2節	学習内容の構造化—新潟県津南町の電子工業—	36
第3節	授業づくり—中等社会科地理授業—	45
1	学習目標と授業づくりへの視点	45
2	学習指導計画案	45

第4節	まとめ	52
註	—第3章—	53
第4章	大陸・国家に対するイメージ	
	—認知的・情意的側面と象徴要素から	54
第1節	研究の方法と手順	54
第2節	調査の方法と実施	56
第3節	認知的側面と情意的側面の関係からみるイメージの全体像	59
	1 評定尺度調査によるイメージの概要	59
	2 両イメージ因子とその相関	63
第4節	各大陸・国家のイメージの主要な内容	67
第5節	まとめ	72
註	—第4章—	73
第5章	世界イメージ形成に影響を及ぼす要因	75
第1節	知名度と行ってみたい国	76
	1 知名度に関するイメージ	76
	2 行ってみたい国に関するイメージ	76
第2節	世界イメージ形成に影響を及ぼす社会的要因	76
	1 マスメディアの影響	77
	2 家族の海外旅行経験からの影響	77
	3 社会科関連以外の授業・部活による影響	77
第3節	記憶に残る地理学習—学校地理教育からの影響—	77
	1 小学校時代の社会科地理授業	77
	2 中学校時代の社会科地理授業	78
	3 高等学校受験のための地理学習	78
	4 記憶に残る国とは	78
第4節	大陸における構成国の位置認知の傾向から	86
第5節	まとめ	88
註	—第5章—	88

<図表目録>

第1図	本研究の枠組み・・・・・・・・・・・・・・・・	5
第2図	地理的見方・考え方と地理的判断力の内容構成と構造化・・・・・・・・	10
第3図	地理的技能の内容構成と構造化・・・・・・・・・・・・・・・・	11
第4図	地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業 のための学習指導システム・・・・・・・・	14
第5図	教科書記述を活用した地理的見方・考え方 に基づく学習内容の構造化・・・・・・・・	17
第6図	地理的技能の育成を重視した社会科地理授業 のための学習指導システム・・・・・・・・	27
第7図	学習内容の構造化－津南町の電子工業－・・・・・・・・	44
第8図	認知的側面と情意的側面の関係からみるイメージの全体像・・・・・・・・	66
第9図	学習指導システムと世界イメージ形成のための方策との対応・・・・	96
第1表	地理的見方と考え方の各見解・・・・・・・・	9
第2表	地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業の 学習指導計画案・・・・・・・・	20
第3表	学習指導計画事例1の分析・・・・・・・・	30
第4表	学習指導計画事例2の分析・・・・・・・・	33
第5表	学習内容の構成－津南町の電子工業－・・・・・・・・	39
第6表	学習指導計画案「津南町の電子工業」・・・・・・・・	48
第7表	工場調査の際の質疑応答例・・・・・・・・	52
第8表	評定対象となる大陸・国家・・・・・・・・	57
第9表	評定尺度の項目・・・・・・・・	58
第10表	認知的イメージの評価とその評定平均値・・・・・・・・	60
第11表	情意的イメージの評価とその評定平均値・・・・・・・・	61
第12表	認知的イメージの因子負荷量・・・・・・・・	64

第13表	情意的イメージの因子負荷量	64
第14表	大陸・国家に対する象徴要素	68
第15表	小学校時代に記憶に残る外国に関する地理授業	79
第16表	中学校時代に記憶に残る外国に関する地理授業	80
第17表	高等学校受験期に得意とした外国とその理由	82
第18表	大陸構成国の位置認知ーアジア・ヨーロッパ・南アメリカの場合ー	87
第19表	学習指導システムの活用と世界イメージ形成 のための方策との対応	95

第1章 序論

第1節 問題の所在

今日、わが国の社会は、国際化・情報化が浸透し、多様化しながら急激な変貌を遂げている。教育界では、このような社会に対応するために、「学び方を学ぶ」力が強調され、社会科地理や地理歴史科地理では、その学力につながる地理的見方・考え方、地理的技能が重視されてきている。ただし、地理的見方・考え方、地理的技能は、網羅的で表層的な多くの内容を重視した学習を通して育成されてゆくよりも、精選された事例をより深く学習してゆくことを通して育成されてゆく方に意味をもつ。つまり、学校現場の限られた時間内において、地理的見方・考え方、地理的技能は、事例学習を通して育成されることが強調されたのである。したがって、今日の地理的見方・考え方、地理的技能の重視は、事例学習の強調と結びつくものとして捉えられる。

ただし、岩田(2000)¹⁾は、このような動向を反映する、平成10年版学習指導要領中学校社会科地理的分野の「世界の諸地域」学習²⁾に対して、国民の文化常識としての世界に関するイメージ(以下、世界イメージ、とする)の育成のためには取り扱われている地理的事象が不足していることを指摘している。なぜならば、地理的見方・考え方、地理的技能の重視によって調べ学習や、事例学習が強調されると、世界イメージに多くの隙間を与えてしまう恐れがあるからである。そして、この指摘は、それを引き継ぐ高校地理の学習内容においても同様と言える。平成11年版学習指導要領高校地理Bの「現代世界の地誌的考察」³⁾についてしてみると、大陸や国家をそれぞれ二つ又は三つ取り上げると示され、授業実践者に委ねられた事例学習が強調されている。もちろん、「地誌的考察」以外においても、全世界の地理的事象を取り上げて学習が進められるはずとなるが、世界イメージを強く念頭において編成されているものではない。

以上から、本研究では、重視される傾向の強い、地理的見方・考え方、地理的技能の育成と、それに伴う事例学習によって心配される、世界イメージ形成上の問題を、本研究の中心課題として捉えたい。そして、本研究の目的は、これらの課題を先行研究から検討した後に設定したい。

地理的見方・考え方は、地理教育の中心目標として、学習指導要領中学校社会科地理的分野の旧版(1978)⁴⁾・現行版(1989)⁵⁾・新版(1999)⁶⁾において重視されてきている。しかし、それには、次の2つの理論的な問題点が考えられる。

①山口(2000)⁷⁾は、従来の各地理教育論の比較から「社会科地理教育」において地理的見方・考え方と関連する地理的態度・価値が公民的資質にあたるとして考察を試みている。しかし、そのもとになっている山口(1998)⁸⁾の各地理教育論の捉え方自体に対して、草原・森分(1999)⁹⁾は疑問を抱き、どの地理教育論も「公民・市民」を育成しようとしているが、その本質を規定できないと述べている。このことから、公民的資質と地理的見方・考え方との関係については、議論の余地が残されている。

②地理的見方・考え方は、以前は地理的意識と混同される用語となっていた(安藤, 1979)¹⁰⁾。しかし、近年では地理的意識の使用があまりみられなくなり¹¹⁾、両者間の明確な概念規定が示されないまま、地理的見方・考え方の方がよく使用されるに至っている。また、山口(1988)の「地理意識」¹²⁾概念では、その中に地理的見方・考え方が含まれ、地理的技能なども混在する位置づけとなるが、他方で戸井田(1999)¹³⁾による地理的見方・考え方と地理的技能の概念の未分化に対する指摘もみられる。したがって、地理的見方・考え方、地理的意識、地理的技能などの関係する諸概念との差異は明瞭とは言えず、したがって、研究者をはじめ、授業実践者においても各概念のコンセンサスが得られにくい状況にあると言える。

以上から、地理的見方・考え方は、社会科目標の社会認識や公民的資質との関係から理論的な位置づけが図られる必要がある。また、それに伴って、地理的見方・考え方と関係する地理的意識、地理的技能、地理的認識、社会的見方・考え方などの用語との概念的差異についての整理や検討、およびそれらの明瞭な概念規定や構造化を行う必要がある。加えて、実践的な研究蓄積による経験科学的な理論の一般化も視野に入れると、理論と実践の統合を図り、以上の理論的な課題に踏み止まるだけでなく、それを生産的に実践と結びつけて具体的な学習指導の領域まで研究を進めてゆく必要がある。

地理的技能については、従来の理論的研究において、田部(1995)¹⁴⁾、中山・和田(1998)¹⁵⁾、西脇(1998)¹⁶⁾、戸井田(1999)¹⁷⁾、草原(1999)¹⁸⁾などがある。そして、それらの論点は、前述の地理的見方・考え方と重複しているところが多く、①地理的技能の内容構成、②地理的技能の構造化、③地理的技能と地理的見方・考え方の関係、④地理的技能と公民的資質の関係、⑤地理的技能のシークエンスの5つにまとめられる。ただし、それらの論点を踏まえ、地理的技能の育成を重視した、学習指導領域まで見通した実践的な研究は不十分と言える。そこで、地理的見方・考え方と同様に、その具体的な学習指導の領域まで研究を進めてゆく必要がある。

世界イメージ形成については、取り上げられる地理的事象の記述が、西欧中心主義的価値観のもとに「第三世界」がネガティブなイメージに彩られたり(熊谷, 2000, p. ii)¹⁹⁾、戦前の東南アジアに関する地理教科書の記述内容の多くが現行のそれに残存している(横井, 1998)²⁰⁾などの課題が存在している。したがって、世界イメージを育成するためには、学習内容となる地理的事象を選定する際に、取り上げる大陸・国家の数や範囲の問題だけに止まらず、社会的な先入観を受けた、実際とズレた地理的事象の記述について、刷新しながら学習内容として取り上げてゆく必要がある。ただし、その前に、児童・生徒がもつ大陸・国家に対する地理的認識やイメージの実態を十分に明らかにし、理解しておくことも重要である。

従来大陸・国家に対する認識やイメージに関する研究では、井田ほか(1996)²¹⁾、山口(1994)²²⁾、寺本・市川(1988)²³⁾などに代表されるように、児童・生徒がもつ、大陸・国家に対する地理的認識やイメージについての実態把握が試みられ、その把握に基づく学習心理を踏まえたカリキュラム開発への提言が行われ、あるいは児童・生徒がもつ既存の大陸・国家に対するイメージ改善のための授業開発が試みられてきた。ただし、このような先行研究には、調査方法や被験者の年齢や学力などの差異から、諸研究の対照や総合的考察が困難なことも少なくない。また、イメージの情意的側面に関する先行研究についてみると、行ってみたい国、住んでみたい国などについての一般的傾向が示されてきたが、一方の認知的側面に関する研究と比べて研究例が数少ない。まして、その認知的側面と情意的側面の関係に関する研究はわずかであり、研究を蓄積してゆく必要がある。

第2節 研究の目的と手順

以上によって、本研究の目的は、理論と実践を結びつけることのできる、地理的見方・考え方、地理的技能を育成する社会科地理授業のための学習指導システムを開発すること、また、高校生の大陸・国家に対するイメージやその形成要因を解明してゆくことによって、地理授業における世界イメージ形成のための方策を導き出すこと、そして最後に、その方策に留意した、その学習指導システムの活用について提示することと設定した。そして、そのための手順は次の5つとする。

(1) 地理的見方・考え方を中心におき、それと関係する地理的技能や地理的イメージなどの諸概念との明瞭な構造化を図り、授業実践に結びつく、地理的見方・考え方を育成する社会科

地理授業のための学習指導システム(以下「地理的見方・考え方の学習指導システム」とする)を開発する。そして、それに基づいて、学習内容の構造化を図り、地理的見方・考え方を育成する高等学校地理授業を設計する(第2章)。

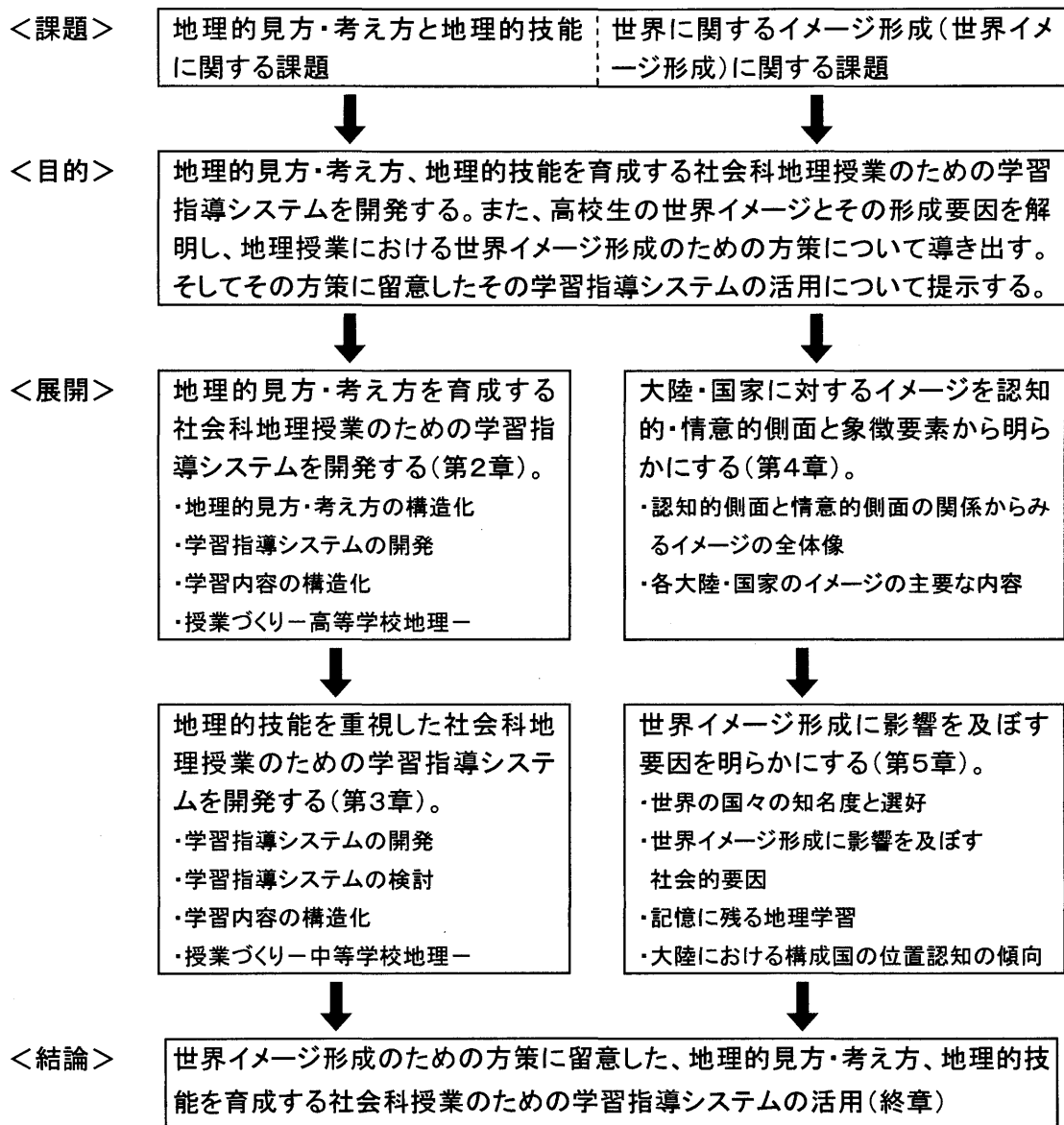
(2)「地理的見方・考え方の学習指導システム」を用いて、地理的見方・考え方の育成を中心におきながらも、それを助ける地理的技能の育成を重視した社会科地理授業のための学習指導システム(以下「地理的技能の学習指導システム」とする)を開発する。そして、その「地理的技能の学習指導システム」を、いくつかの学習指導計画より分析することを通して、その有効性を検証する。さらに、それに基づいて、学習内容の構造化を図り、地理的技能の育成を重視した中等社会科地理授業を設計する(第3章)。

(3)高校生がもつ世界における複数の大陸・国家に対するイメージについて、認知的側面と情意的側面の関係からその全体像を明らかにし、さらに、各大陸・国家のイメージの主要な内容について明らかにする(第4章)。

(4)大陸・国家に対するイメージ形成に影響を及ぼす要因を追究していくために、アンケート調査(世界イメージ形成に関する選好・影響・経験・地理学習の記憶などについての記述調査、大陸における構成国に関する位置認知調査)の結果から検討し、その要因を明らかにする(第5章)。

(5)以上の結果をまとめ、地理的見方・考え方、地理的技能を育成する社会科地理授業のための学習指導システムを提示する。また、高校生の世界イメージとその形成に影響を及ぼす要因から、地理授業における世界イメージ形成のための方策について考察する。そして最後に、その方策に留意した、地理的見方・考え方、地理的技能を育成する社会科地理授業のための学習指導システムの活用について提示する(終章)。

以上の5つの手順の関係を示す、本研究の枠組みは、次の第1図によって示すことができる。



第1図 本研究の枠組み

註一第1章一

- 1) 岩田一彦「社会科地理における基礎・基本構成の理論と実際」『新地理』 vol.47(3・4), 2000, pp.54-63.
- 2) 文部省『中学校学習指導要領解説—社会編—』大阪書籍, 1999, pp.21-78.
- 3) 文部省『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』実教出版, 1999, pp.196-254.
- 4) 文部省『中学校指導書社会編』大阪書籍, 1978, pp.15-60.
- 5) 文部省『中学校指導書社会編』大阪書籍, 1989, pp.16-54.
- 6) 前掲 2).
- 7) 山口幸男「地理教育と公民的資質」『新地理』 vol.47(3・4), 2000, pp.103-110.
- 8) 山口幸男「わが国における各種地理教育論と社会科地理教育の意義」『社会科教育研究』 No.79, 1998, pp.1-8.
- 9) 草原和博・森分孝治「論評社会科地理の本質をめぐって—山口論文への疑問—」『社会科教育研究』 No.81, 1999, pp.42-44.
- 10) 安藤正紀「戦後の地理教育界における学力観に関する予察的考察」『新地理』 vol.27(2), 1979, pp.40-48.
- 11) 菊池(1976b)の見解に基づく。菊池利夫編著『高校地理教育の原理と方法』古今書院, 1976b, pp.60-87.
- 12) 山口幸男「わが国における地理意識研究の分類と文献」『新地理』 vol.35(4), 1988, pp.33-35.
- 13) 戸井田克己「地理的見方・考え方の基礎的考察」井上ほか『新しい地理授業のすすめ方—見方・考え方を育てる—』古今書院, 1999, pp.8-33.
- 14) 田部俊充「アメリカ社会科における地理的技能の考察」『社会科教育研究』 No.73, 1995, pp.40-47.
- 15) 中山修一・和田文雄「海外における地理教育改革の諸動向とその事例」『地理学評論』 vol.71(2), 1998, pp.133-140.
- 16) 西脇保幸「地理教育における技能の育成」『地理学評論』 vol.71(2), 1998, pp.122-127.
- 17) 前掲 13).
- 18) 草原和博「アメリカ・ナショナルスタンダード・地理フレームワーク」市川博ほか著『小・中・高等学校の一貫による社会科関連科目の連携に基づくフレームワークの研究』平成 9 ~ 10 年

度科学研究費補助研究成果報告書, 1999, pp.29-58.

19) 熊谷圭知「はじめに」熊谷圭知・西川大二郎編『第三世界を描く地誌ーローカルからグローバルへー』古今書院, 2000, pp. i -iv .

20) 横井香織「社会科における東南アジア認識の問題」『社会系教科教育学研究』No.10, 1998, pp.47-53.

21) 井田仁康・陸川晃・塩澤孝岐「世界地誌学習における「他国を見る目」の教材化ー中国、ニュージーランド、日本の生徒の調査に基づいてー」『社会科教育研究』No.75, 1996, pp.47-59.

22) 山口幸男「地理意識発達の実証的究明」『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』vol.43, 1994, pp.121-152.

23) 寺本潔・市川靖子「第5部大学生のオセアニア認識の形成過程」愛知教育大学地理学教室編『国際理解教育と教員養成』, 1988, pp.51-100.

第2章 地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業 のための学習指導システムの開発

本章の目的は、地理的見方・考え方を中心におき、それと関係する諸概念の明瞭な構造化を図り、それに基づいて、学習内容の構造化を図ることによって、授業実践に結びつく、地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業のための学習指導システムを開発することである。そのための手順は次の5つとする。

- ①地理的見方・考え方の規定とその内容構成および構造化を図る。
- ②その規定した地理的見方・考え方の構造に基づいて関係諸概念の構造化を図る。
- ③以上から地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業のための学習指導システムを開発する。
- ④規定した地理的見方・考え方の構造から教科書の記述内容について分析し、その結果から学習内容の構造化を図る。
- ⑤開発した学習指導システムに、その構造化された学習内容を用いて、学習指導計画案を作成する。

第1節 地理的見方・考え方の構造化

1 地理的見方・考え方の「地理的・・・」

先行研究¹⁾から、「地理」と「意識」の概念的整合性を明瞭に理解できず、「地理(地理的)」の意味内容を地理学との接点から明瞭に理解することは困難である。このことは、地理的見方・考え方の「地理的・・・」においても同様に捉えられ、その「地理的」の概念的な整合性は曖昧である。そこで、その不明瞭な「地理的・・・」という部分の意味内容に生産的な意味づけを行う必要があり、筆者は、「地理的・・・」の部分に諸概念の共通項となる「地理的事象に対する・・・」という意味で捉え直す。また、地理学の対象となる地理的事象²⁾を踏まえて、その地理的事象を「地球表面における諸現象やそれら相互の関係・概念・法則などの多様な諸事象」とし、その「地理的・・・(事象)」という用語は「地球表面」の意味として広義に地理学に関わるものごとすべてと規定する。そして、その地理的事象を、学習内容の内容的側面として、①現象、②関係・概念・法則など、③授業者が目指す公民的資質から捉えられる地理的事象(①・②)の社会的意義の3つに構造化

しておくことにする。

第1表 地理的見方と考え方の各見解

論者	地理的見方	地理的考え方
昭和45年版 中学校学習指 導書(1970)	現実の複雑な地表面の状 態から、地理的事象をとら えること。	これらの事象について、 地理的に考察すること。
平成11年版 中学校学習指 導要領解説 (1999)	日本や世界に見られる諸 事象を位置や空間的な広 がりとのかわり地理 的事象として見いだす。	それらの事象を地域という 枠組みの中で考察するこ と。
滝口(1973)	地表面に地域をとらえよう とする認識手段。	地域的に把握された諸事 象の考察方法。
大森(1986)	事象を見る観点あるいは 視点。	事象を思考する方法。
菊池(1976b)	「位置」・「分布」・「地域」	「地域性」・「他地域との関 係」・「地理的診断」・「地 方的特殊性」・「一般的共 通性」・「地理的世界観」
岩田(1984)	「位置」・「分布」・「景観」・ 「環境」・「地域」	「価値判断能力」
Christopher Salter(1987)*	「位置」・「場所」 (Observation)	「環境」・「移動」・「地域」 (Analysis)

* アメリカ・5大テーマに基づく

2 地理的見方・考え方の内容構成と構造化

現行版(1989)³⁾や旧版(1978)⁴⁾・昭和45年版(1970)⁵⁾をはじめ、多数の見解における地理的見方・考え方は、見方と考え方が一括され、似通った内容にて取り扱われる場合が多い。このことは、川合(1986)⁶⁾による、地理的見方・考え方が実践者によって作り上げられ、時代ごとに変容させるものであるという、抽象的ながら積極的な見解において有効である。しかし、地理学的な立場から中村(1997)⁷⁾は、学習指導要領における地理的見方・考え方の理解の困難さを指摘し、篠原⁸⁾は、検定教科書に対する高校教育現場にある生徒・教師の強い反発から、地理学会の合意の得られていない地理的見方・考え方が地理教育の目標となり得るのかと疑問視している。

このことから、従来の多様に捉えられる地理的見方・考え方では、それらが授業との関わり得られた内容であるにしても、その意味内容や構造化が不明瞭となってしまう、地理学の基本的な概念となる意味が明確に伝わって来ないとも考えられる。これによって、地理的事象が曖昧に取

り上げられたり、長年にわたって授業実践に根付き、授業を活性化できるような地理的見方・考え方に関する学習指導を行うことや、その実践的研究の積み重ねや研究交流が困難になっていることも考えられる。実践現場を考慮すると、明瞭で理解しやすい、基礎・基本となる地理的見方・考え方の規定とその内容構成と構造化を理論的に図られる必要がある。

本研究では、以上の議論を踏まえ、①地理的見方・考え方の区分による構造化、②地理的見方・考え方の主な対象となる地理学の基本的な概念となるキー概念による明瞭化の2点がそのための有効な観点であると考え、先行研究や学習指導要領より、第1表のような、少なくともその構造化がうかがえる地理的見方・考え方を区分する見解⁹⁾と、キー概念の構造化¹⁰⁾や授業実践への有効性が示される¹¹⁾アメリカ五大テーマのような地理的見方・考え方の内部構成を理解しやすいキー概念を用いる見解¹²⁾に着目する。

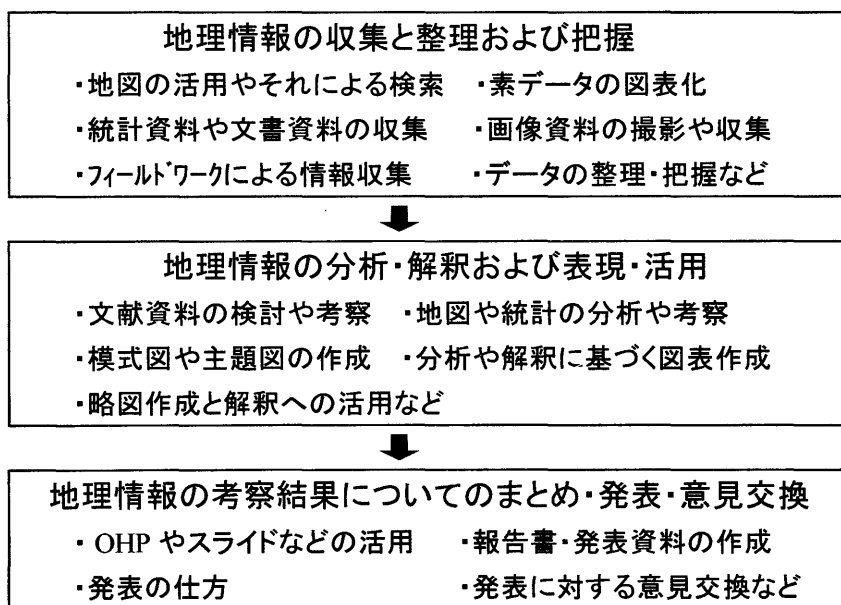
	捉える手法	キー概念	主な対象となる内容
地理的見方 地理的事象に対する把握のための視点・観点	広がりや時間変化などの比較・関連による把握	空間	・位置・方位・距離・広がりなど
		場所	・地域的特色・地域的現象・空間的傾向・分布など
地理的考え方 地理的事象に対する理解のための思考・考察する方法	関係や要因や作用やまとまりや変容などの探究	立地	・立地条件・因子など
		環境	・環境と人間・環境イメージ・景観など
		地域	・地域間相互作用・地域群システム・移動・地域構成変容・地域政策など
地理的判断力 地理的事象に対する、価値づけや評価するための判断や、目的の実現のための手段を選択決定する判断の能力	・地理的見方考え方の活用 ・問題の発見や把握・達成すべき目的の設定・実践的態度への接近など	価値判断	・合理的で多様な側面から、価値づけたり評価したりする
		問題解決	・目的実現のための手段を選択し決定する
		意志決定	・自己の態度に直接的にむすびつけ、実践的な行動をねらい判断する

第2図 地理的見方・考え方と地理的判断力
の内容構成と構造化

それらを比較・検討した結果、本研究で規定する地理的見方・考え方は、地理的事象に対する教育目標に応じて、相互補完的な関係をもつものとし、それを第1表で見られる先行研究や新版(1999)¹³⁾に照らし合わせることによって、第2図のように、キー概念を抽出し、その内容構成および構造化を図った(図中の「地理的判断力」は後述)。この構造化によって、本研究の地理的見方と地理的考え方は、主な対象(地理的事象)を捉えるための各々の手法を備え、各キー概念が常に連動し有機的な関係をもつ。

3 「地理的・・・」諸概念との構造化

本研究では、地理的見方・考え方との概念的な差異を明瞭にするために、地理的技能を「地理的見方・考え方の育成を助ける技術と能力」と規定する。その地理的技能の内容構成と構造化については、西脇(1998)¹⁴⁾と新版(1999)¹⁵⁾に照らし合わせ、第3図のように、本研究の地理的見方・考え方の構造に沿うことができる3段階の構造化を図った。その3段目は後述の公民的資質につながる地理的判断力に対応する。



第3図 地理的技能の内容構成と構造化

地理的認識は、学習活動を通して得られる学習成果の全てであり、本研究では、それを「地理的事象に対して、知ろうとすることや推論し理解しようとする事、そしてその成果となる知識・理解および技術・能力となる」と規定する。

地理的イメージは、先行研究においてはその概念的 content についての検討がほとんどなされていないが、イメージは、近年の地理学において盛んに取り上げられていることから、それを地理教育においても取り上げる必要がある。本研究では、地理学の場所イメージの定義を参考として¹⁶⁾、それを「外的な地理的事象に対して、日常生活全般の経験(マスメディア・学校教育・会話など)から得られた、児童・生徒の心の中にうつしだされる地理的事象のすべて」と規定する。

以上から、これらの関係諸概念間の構造化を図ると、学習目標を念頭においた学習内容(地理的事象、地理的見方・考え方、地理的技能)から得られる学習成果が地理的認識となり、それは、日常生活全般の経験的成果となる地理的イメージとなって心の中に組み込まれ、うつしだされる地理的事象となる。

4 社会認識および公民的資質への構造化

社会科の目標である社会認識は、学習内容の中にある社会的事象と社会的見方・考え方によって形成される。そして、地理的認識、あるいは歴史的認識や政治・経済的認識などは、そのような社会認識の下位概念として位置づけられる。

本研究では、規定した地理的事象や地理的見方・考え方の対応関係を念頭におきながら、社会的事象を「社会全般に関わる事柄・出来事(現象)や意味(関係・概念・法則など)の多様な諸事象」と規定し¹⁷⁾、社会的見方を「社会的事象に対する把握のための観点・視点」、社会的考え方を「社会的事象に対する理解のための思考・考察する方法」と規定する。

地理的事象は、歴史的事象や政治・経済的事象などとともに、社会的事象の下位概念となる。同様に、地理的見方・考え方は、歴史的見方・考え方や政治・経済的見方・考え方などとともに、社会的見方・考え方の下位概念となり、社会的見方の中に地理的見方が、社会的考え方の中に地理的考え方が含まれる。

次に、この社会的見方・考え方と、社会科目標である社会認識を通して得られる公民的資質の育成との対応関係を図る必要がある。

本研究では、地理的見方・考え方の構造を明瞭化し、かつ複雑となっていた諸概念の明瞭な構造化を図るために、社会的見方・考え方と、公民的資質の育成とに直接的な理論的整合性を図らない。その代わりに、公民的資質の育成に直接的に通じ、社会的見方・考え方から構造化さ

れる、「社会的判断力」という新たな概念を投入することによって、それらの明確な対応関係を図ることとする。

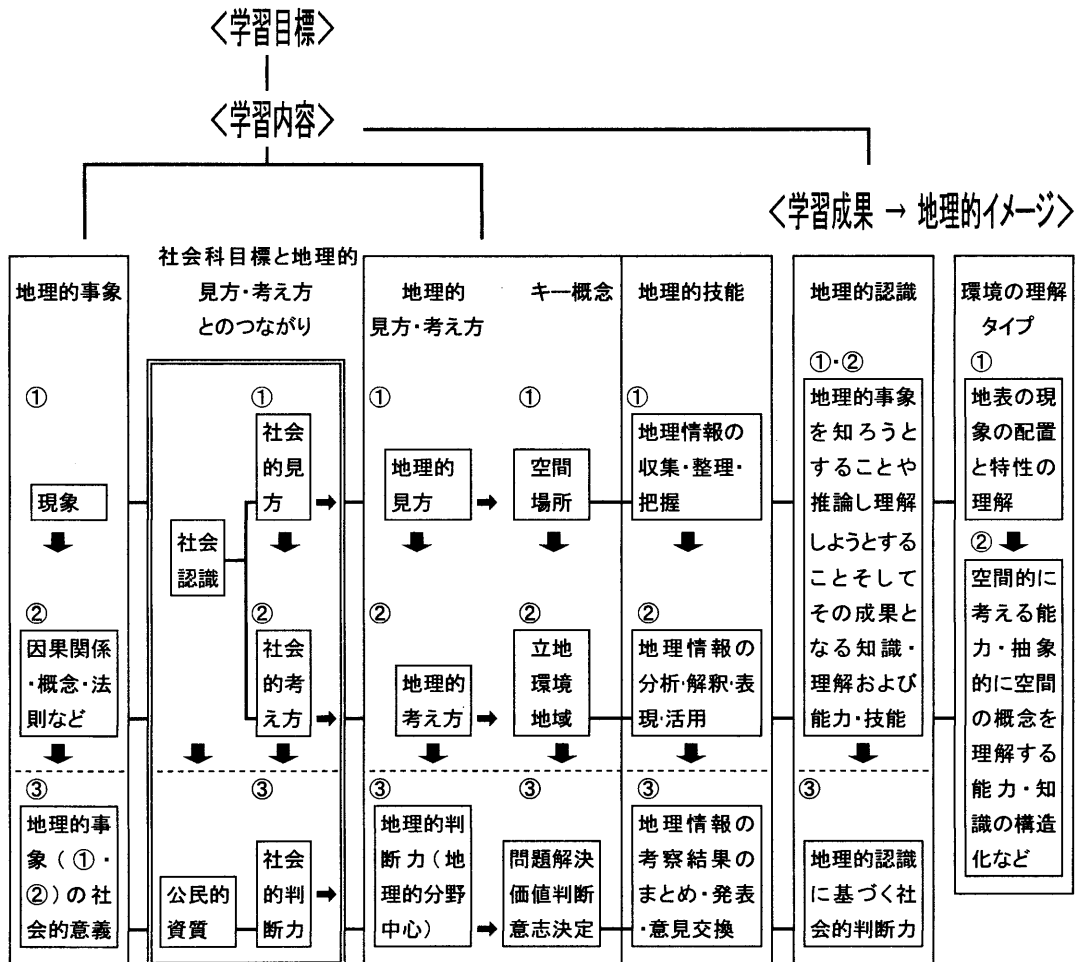
その「社会的判断力」を、「社会的事象の社会的意義に対して、価値づけたり評価したりするための判断や、目的実現のための手段を選択したり決定したりする判断に達する能力」と規定する¹⁸⁾。

その下位概念となる「地理的判断力」は、地理的分野の地理的事象の社会的意義に対して、その「社会的判断力」を構成する能力の一つとして、歴史・公民分野と有機的に関連しながら育成するものと規定し、そのキー概念を価値判断、問題解決、意志決定の3つとする(第2図)。

社会的意義をもつ地理的事象については、民族、都市、環境、人口などの諸問題があげられる。それと「地理的判断力」による学習活動から得られる学習成果は、学習内容の内容的側面と方法的側面の総合となる「地理的認識に基づく社会的判断力」として位置づけられる。すなわち、これと歴史的認識や政治・経済的認識などに基づく社会的判断力の総合によって公民的資質が育成されることになる。言い換えれば、社会的事象やそれがもつ社会的意義と、社会的見方・考え方やそれから構造化される社会的判断力によって、総合的に得られる学習成果は、公民的資質の育成となる。

第2節 「地理的見方・考え方の学習指導システム」のフレームと活用

以上の検討・考察から、第4図のようなフレームをもつ、地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業のための学習指導システムを開発した。



第4図 地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業のための学習指導システムのフレーム

このフレームについて、図中の上段から説明したい。学習目標を達成するための学習内容

は、地理的事象と、地理的見方・考え方、およびそれに従属する地理的技能によって構成される。その学習内容は、授業者が意図する教育方法によって組織され、授業に用いられる。その構造化の際には、地誌的、系統的、主題的などの学習アプローチの取り入れ方に配慮する必要がある。

社会科目標との関連から、このフレームの中にある学習内容の諸概念についてみると、社会認識には、社会的見方・考え方とその下位概念となる地理的見方・考え方が対応し、公民的資質には「社会的判断力」とその下位概念となる「地理的判断力」が対応する。

図中の上から下への矢印記号のように、社会認識から公民的資質へ、社会的見方・考え方から「社会的判断力」へ、地理的見方・考え方から「地理的判断力」へと、それらは、基本的な学習指導の流れとして構造化される。

一方、図中の横線のつながりのように、地理的見方・考え方の対象となる地理的事象は、地理的見方に現象が対応し、地理的考え方にそれらの関係・概念・法則などが対応し、「地理的判断力」に地理的事象の社会的意義が対応する。

地理的見方・考え方を助ける地理的技能は、地理的見方に地理情報の収集・整理・把握が対応し、地理的考え方に地理情報の分析・解釈・表現・活用が対応し、「地理的判断力」が地理情報の考察結果のまとめ・発表・意見交換が対応する。

以上のように、図中の丸数字は、各関係諸概念の内容が対応することを意味する。他方で学習成果となる地理的認識では、その内容が総合的で複雑であるため①と②の区別を行わずに一括し、③の「地理的認識に基づく社会的判断力」については、公民的資質に通じる「地理的判断力」に対応する。地理的イメージは、ダウنزの環境の2つの理解タイプ¹⁹⁾を用いて、①と②が対応するのみに止まる。

続いて、この学習指導システムの基本的な活用上の手順について、次の6段階から例示する(主に<1>～<3>は社会認識の形成、<4>～<6>は公民的資質の育成)。

<1> 学習目標を念頭におき、その学習内容を構成するために、地理的事象を教科書や一般資料などから広く素材として収集・選定する。

<2> 選定された地理的事象を、地理的見方・考え方のキー概念から、その主な対象となる内容を分析する。それによって得られた地理的事象は、授業者が意図する任意の学問的、教育的視点をもって精選し、学習内容の構造化を図る。同時に地理的見方・考え方の内容構成も検討し、そのための地理的技能や学習アプローチを選定する。

<3> 発問の組織化を図りながら、必要に応じて、問題解決学習、概念探究学習、体験的学習

などの特色ある教育方法を組み入れ、学習内容の再構造化を図り、学習目標を設定する。それを基に学習指導計画案を設計し授業実践を行う。

<4>その学習成果となる児童・生徒の地理的認識を踏まえ、授業者が目指す「公民・市民」育成のための任意の視点や方法論をもって、地理的事象のもつ社会的意義を捉え、地理的判断力と地理的見方・考え方のキー概念から、その主な対象となる内容を分析する。それによって得られた地理的事象を、任意の教育的、学問的視点をもって精選し、学習内容の構造化を図る。同時に「地理的判断力」と地理的見方・考え方の内容構成も検討し、そのための地理的技能や学習アプローチを選定する。

<5>必要に応じて特色ある教育方法を用いて、学習内容の再構造化を図り、学習目標を設定する。それを基に学習指導計画案を設計し授業実践を行う。

<6>学習後の児童・生徒の地理的認識は、次の学習指導や実生活に活かせるようにし、また、児童・生徒の日常生活全般の経験的成果となる地理的イメージに、その地理的認識がどのように位置づいたか気づかせるようにする。

第3節 授業づくりー高等学校地理「アメリカの五大湖南岸工業地域と自動車産業および酸性雨問題」ー

地理的見方・考え方のキー概念に基づいて、とくに高校地理B教科書小単元の記述内容の分析を行い、地理的見方・考え方に基づく学習内容の構造化を図った(第5図)。そのための視点は、社会認識を通じた公民的資質の育成を視野に入れ、アメリカ五大湖南岸工業地域を中心として次の3つとした。

- ①アメリカの豊富な地下資源に係る工業立地。
- ②世界的なアメリカの自動車産業。
- ③世界的な環境問題である酸性雨。

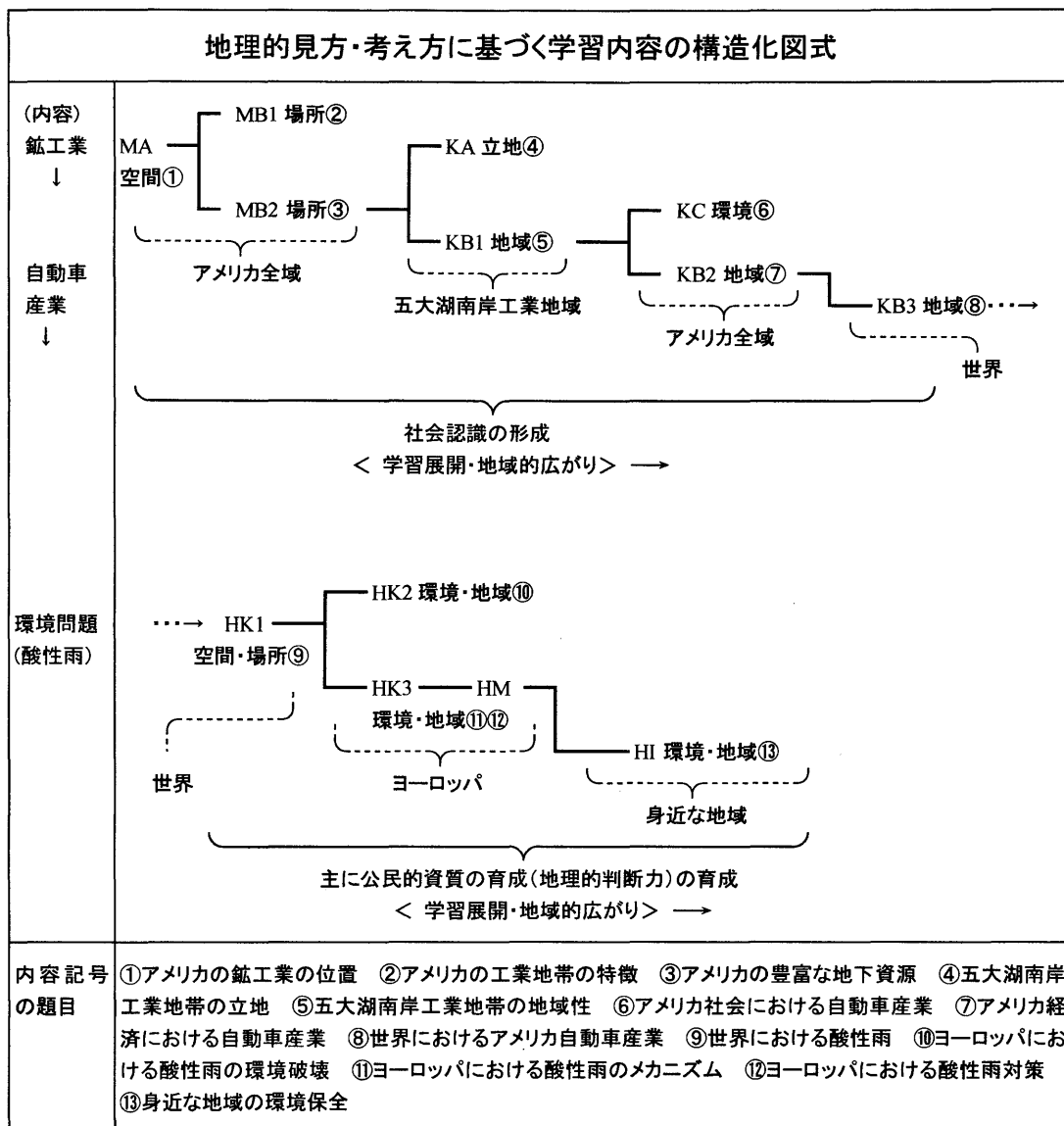
このような視点の設定によって、学問的体系を基本としながらも、学習目標に応じて、児童・生徒の興味・関心や学習心理、話題性のある社会的事象、身近な地域などの多様な視点を組み込むことが可能になると思われる。

キー概念	主な内容	分析された教科書の記述内容(山本正三ほか, 超大国の鉱工業, 『詳説地理B最新版』二宮書店, 1998, pp.184-186)	内容記号
地理的 見方	空間 位置・ 広がり	「アメリカの鉱工業地域は東半分を中心とするが大きく6つに分かれる。その中の五大湖南岸工業地帯は五大湖の南部に位置しデトロイトを中心に広がる。」*(教科書記述に該当する部分がない。記述内容は p.184 の主題図「アメリカの鉱工業地域」より筆者が作成)。	MA
	場所 分布・ 地域的 特色	アメリカの工業は大西洋岸の地域から始まった。初期の繊維工業は水力の利用が可能な滝線都市に立地した。ニューイングランド地方では繊維産業以外にも印刷業や精密機械工業が発達した。その後、電子工業などがこの地域の工業の中心になっている。またニューヨークなどの大都市では大消費地をひかえて食品加工や縫製・印刷・製本などの工業が発達するとともに資源輸入の利便性を生かした石油関連工業や製鉄業の立地もみられる。	MB 1
		アメリカは各種の原料資源やエネルギー資源に恵まれロシアとならぶ資源大国といつてよい。石油の開発は19世紀末にロサンゼルス近郊で始まった。その後メキシコ湾岸からロッキー山脈南東麓にかけての地域やカリフォルニア盆地へと進み現在ではアラスカ北部でも油田の開発が進んでいる。アメリカは 1970 年代に至るまで世界最大の産出国であり今でも大産出国の一つである。しかし油田の老朽化や、自動車の普及などによる石油需要の増加などによってベネズエラやメキシコから大量の石油を輸入し世界最大の石油輸出国でもある。石炭や天然ガスにも恵まれており石炭の産出量は国内需要を満たすばかりではなく世界的な輸出国にもなっている。	MB 2
地理的 考え	立地 条件	五大湖南岸地域はアメリカの伝統的な重工業地帯である。なかでも製鉄業が重要な役割を果たしてきた。スペリオル湖沿岸には西岸のメサビ鉄山をはじめとして鉄山が多い。またアパラチア炭田と中央炭田が五大湖の南方にある。この鉄鉱と石炭が五大湖・河川・運河による水運で結びつけられゲーリ・クリーブランド・ピッツバーグ・ダルースなどのいくつもの製鉄都市が立地した。	KA
方 地域 変容	地域間 相互作用・ 地域 システム ・地域 変容	製鉄業の発達はほかの多くの工業が成立する基盤となりたとえばデトロイトとその郊外は自動車工業の中心となったうえ周囲にガラス工業やゴム工業などの関連するさまざまな工業を引きつけた。また中西部の広大な農業地帯もこの地域の工業の発展をうながした。シカゴには農業機械の工場が集中した。農産物加工業としてはシカゴの食肉加工、ミルウォーキーのビール醸造、ミシガン州バトルクリークの穀物食品加工などのように各地に工場がみられるようになった。しかしこの地域は国内資源とりわけ鉄鉱資源の減少により立地上の有利さが失われつつある。	KB 1
		アメリカの自動車工業は国内の需要を満たすばかりではなく世界各地に輸出されてきたため自動車工業はアメリカの工業の象徴と考えられるようになってきた。しかも自動車工業は多数の部品を使う総合組立型工業である。たとえば鉄鋼業やゴム・プラスチック・ガラスなど広範な分野の関連工場と結合するなど非常に多く関連産業をもつため自動車工業の発展は経済のさまざまな分野に波及効果をもたらした。	KB 2
		アメリカの自動車工業は長い間世界に君臨していたが石油危機以降の 1970 年代後半から 1993 年まで日本がコストの低減と品質の向上により生産台数でアメリカを追い抜いた。このため海外市場のみならずアメリカ国内でもアメリカ製の自動車と日本車とが競争するようになった。1980 年代には日本製の自動車のアメリカへの輸出をめぐって日米貿易摩擦がおこった。今日では韓国なども加わり競争は激しさを増しているが一方ではアメリカと日本をはじめとする諸外国の企業の間で技術提携や資本参加などの協力もみられるようになってきた。	KB 3
環境	人々と 社会的 環境	今世紀初頭にフォードによる自動車の大量生産がデトロイト郊外で始められた。第1次世界大戦後には自動車の生産が爆発的に伸び国民生活のすみずみまで浸透するようになった。アメリカは広大な国土をもち人口密度も比較的低いので自動車は効率的な交通手段と考えており現在自動車はアメリカの生活様式のなかでなくてはならないものになっている。	KC



キー 概念	見方・ 考え方	分析された教科書の記述内容(佐藤久ほか, ヨーロッパの酸性雨, 『新詳地理B初訂版』帝国書院, 1998, pp.99-101)	内容 記号
地 理 的 判 断 力	空間・ 場所	酸性雨の被害はヨーロッパだけでなく北アメリカでも深刻である。カナダでは湖沼に大きな被害が出ているほかアメリカのニューイングランドでも湖沼の生物が激減した。最近ではインド、マレーシア、メキシコ、ブラジルなど発展途上国に急速に広がっている。石炭への依存度の高い中国でも被害が拡大している。日本でも各地でpH4.5前後の酸性雨が観測されている。	HK 1
	環境 ・地域	ドイツのシュヴァルツヴァルトはとうひやもみなどの針葉樹を中心とした美しい人工林である。森林浴や山歩きに訪れる人も多くドイツ人が誇る貴重な財産であった。このシュヴァルツヴァルトが深刻な被害を受けている。立ち枯れて白骨のようになった木が並び弱った樹木は風で簡単に倒れて横たわっている。この状態は標高が高いほどめだち山頂付近ははげ山になっているところも多い。また社会主義国であった東ドイツ・チェコスロバキア・ポーランドにまたがる地域は「黒い三角地帯」とよばれるほど大気汚染が激しい。かつての東ヨーロッパのアルプスといわれた山地の美しい針葉樹林が数百kmにわたって枯死している。酸性雨に洗われた葉は表面の細胞が弱まって病気にかかりやがて枯れてしまう。酸性雨が浸透した土壌では酸性化が進み木の生長に必要な養分が減り木の根が衰えてやがて枯れてしまう。酸性雨以外にもいくつかの理由が考えられるがこうしてつぎつぎに木が枯れ森林は樹木の墓場と化してしまうのである。湖沼に降った雨は湖沼の水を酸性にした。まずプランクトンが減り食物連鎖が断ち切れそれをえさにする魚が減少した。また湖底の泥にふくまれる有害な金属が湖水にとけ出した結果、魚などの水生生物を死滅させる原因となった。	HK 2
	環境 ・地域	スウェーデンやノルウェーなどスカンディナヴィア半島の国々では1960年代から湖の魚が姿を消しはじめた。スウェーデンでは国内にある85000もの湖沼のうち、約20%で魚がほとんど死滅してしまった。ポーランドやドイツなどでは大理石でできた建造物や石像が酸性雨や風化などによりぼろぼろになり金属でできたモニュメントも腐食が進んだ。雨が強い酸をふくむ酸性雨となっていたのである。だが北欧諸国はこれだけ強い酸性雨を降らせるような汚染物質を排出していない。原因はヨーロッパ中部から流れ込んでくる汚染された大気にあった。酸性の強さはpHであらわされる。pH7を中性として数値が小さくなるほど酸性が強くなる。pH5.6以下の雨を酸性雨とよぶがドイツなどヨーロッパ中部ではpH4に近い強い酸性の雨が観測されている。酸性雨が降るしくみは次のとおりである。石炭や石油などの化石燃料を燃焼させると硫酸酸化物や窒素酸化物が発生する。工場や自動車から大気中に排出されたこれらの物質は化学反応をおこして硫酸や硝酸にかわり雲に取りこまれて強い酸性の雨になって地上に降り注ぐのである。ヨーロッパでは、工業の発展とともにこれらの物質を大気中に放出し続けてきた。それが偏西風などのいって広く拡散し、国境を越えてスカンディナヴィア半島の湖沼や森林地帯に酸性雨などを降らせたのである。	HK 3
問題 解決	環境 ・地域	このような酸性雨の被害をくいとめるには原因となる汚染物質の排出を減らさなければならない。1979年にはヨーロッパ諸国が中心となって「長距離越境大気汚染条約」が締結され硫酸酸化物の30%削減を目標にきびしい規定を行っている。しかし大きな汚染源となっている東ヨーロッパ諸国では工場環境保護設備が十分でなく自動車の排ガス規制もなかったため状況が好転するには時間がかかるとみられる。	HM
意志 決定	環境 ・地域	「国際的な取り組みばかりでなく日常生活での環境保護への努力もたいせつである。電気や水をむだにしない買い物には自分で袋を用意するごみをできるだけ出さないようにし再生可能な資源ごみの分別に協力するなど市民全体でとり組めば大きな効果をもたらす。」(教科書記述に連続して該当する部分がない。記述内容はp.92, 1.7より導出。)	HI





**第5図 教科書記述を活用した地理的見方・考え方に
基づく学習内容の構造化**

その学習展開については、五大湖南岸工業地域を中心としながら、アメリカ全域→五大湖南岸工業地域→アメリカ全域→世界→ヨーロッパ→身近な地域、と空間的な広がりを軸とし、その軸に沿っては、主に前半を社会認識の形成、後半を公民的資質の育成とした。

総じて、以上のような学習内容の構造化に基づく学習目標を、アメリカの五大湖南岸工業に関する学習を通して、社会認識、とくに地理的見方・考え方を養い、その工業と関係する世界およびヨーロッパの酸性雨問題から、公民的資質、とくに環境問題に対する地理的判断力を育成することと設定した。

第2表 地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業の学習指導計画面

1.学習テーマ:アメリカの五大湖南岸工業地域と自動車産業および酸性雨問題 (全5時間)。 2.学習目標 :アメリカの五大湖南岸工業に関する学習を通して、社会認識、とくに地理的見方・考え方を養う。 そして、それと関係する世界およびヨーロッパの酸性雨問題の事例から、公民的資質、とくに地理的判断力を育成する。				
段階	■発問 ◆(キー概念) ★<地理的技能①②③>	学習活動 (資料)	到達目標(生徒から引き出したい●知識・▲判断・態度)	内容 記号
第1時 (導入) 地誌的 方法	■アメリカの鋳工業の主題図から、どのような鋳山や工業が見られるのだろうか、鉄鋳・炭田・工業地の分布と特徴は。 ◆(空間・場所)★<①>	T :主題図を提示し発問する(1)。 P :考え、答える。国土や地方ごとに考える。	●五大湖周辺で多くみられる。 ●五大湖の南のアパラチア炭田や中央炭田がみられる。 ●五大湖沿岸地域、ニューイングランド地域、中部大西洋岸地域、南部地域、太平洋岸地域、中西部地域がみられる。 ●自動車を製造している。 ●五大湖を利用し、近くの鉄鋳や石炭を利用している。	MA MB1 MB2
(展開 1) 系統的 方法	■五大湖周辺の工業はどのようにして成り立っているのか。 ◆(立地)★<②> ■資料から、この工業地域の自動車産業はどのように形成し、周辺地域とつながり、影響を及ぼしているのか。 ◆(地域)★<②>	T :発問し、考えさせる。 P :考え、推論する(2)。 T :発問し、考えさせる(3)。 P :考え、答える。	●メサビ鉄山やアパラチア炭田などがむすびつき、五大湖の水運によって結びつけられ、ゲーリヤやピッツバーグなどのいくつかの製鉄都市が成立した。 ●近くにメガロポリスがあり、作ったものは近くの大都市で売られる。 ●都市がいくつもあるから労働者が多い。 ●デトロイトとその郊外は自動車工業の中心となつたうえ、周囲にガラスやゴム工業などの関連する工業を引きつけた。 ●ミシガン州は自動車工業の中心であり、デトロイト大都市圏が圧倒的な中心である。ここに、アメリカ3大自動車会社の本社工場があり、また周りの都市にもたくさんの自動車組立・部品・関連工場が集まっている。デトロイトは関連する周辺都市あつての立地となる。 ●運河を使ってメガロポリスへ運び、セントローレンス海路を利用してヨーロッパなどに輸出できる。 ●中西部の広大な農業地帯もシカゴ(農業機械)・ミルウォーキー(ビール醸造)などの工業発達をうながした。農業地帯あつての農業に関連する機械工業地帯の立地となる。	KA KB1
第2時 (展開 2) 系統的 方法	■資料からアメリカ社会(生活)と自動車の関係について考えてみよう。◆(環境)★<②> ■資料から、この地域の自動車産業はどのように変容してきたのか。その変容要因を、国内の工業地域と比較しながら、世界におけるアメリカの自動車産業の動向にから調べてみよう。 ◆(地域)★<②>	T :発問し、考えさせる(4)。 P :考え、検証し答える。 T :発問し、考えさせる(5)。 P :考え、答える。	●国土が広くハイウェイが普及しているから自動車の国なのである。 ●ハイウェイだけでなく一般道路も世界で最も整備される能率的な国である。 ●人口密度も低いことも関係している。 ●自動車はアメリカ社会になくはならないものである。 ●国内の鉄鋳資源の減少により、立地上の有利さが弱まる。 ●第1次大戦後自動車生産は爆発的に伸び、世界各地に輸出されてきたため、アメリカの工業の象徴にまでになった。 ●石油危機以後、コスト低減と品質向上の日本が生産台数でアメリカを追い抜いた。 ●海外市場のみならず、アメリカ国内でも日本車と競争するようになった。さらに日米貿易摩擦がおこつた。 ●今日、両企業間で技術提携や資本参加などの協力もみられる。 ●国内の工業地帯の中心が、豊富な労働力が得られ安価な地代となる、サンベルトと呼ばれる南半部に次第にその比重が移りつつある。 ●五大湖南岸地域は工業製品出荷額・製造業雇用者が最も高いが、製造業出荷額は下降傾向にある。 ●アメリカ・日本・ドイツは海外生産が多く、中進国や発展途上国において自動車の組立台数が多い。また、アメリカで日本の企業が生産している。	KD KB2 KB3

<p>第3時 (発展1) まとめ</p>	<p>■以上の学習から、五大湖沿岸工業地域とアメリカ自動車産業の動向をまとめ確認しよう。</p> <p>■五大湖沿岸工業地域のイラスト・イメージ図を描き、その紹介文を作成しよう。 ★<③></p>	<p>T: まとめを解説する。</p> <p>P: 学習成果、地理的認識を確認する(6)。</p> <p>T: 作業指示を出す。</p> <p>P: 作業を行い、発表し合う(7)。</p>	<p>●五大湖沿岸工業地域の中心工業は、デトロイトを中心とした自動車産業である。</p> <p>●この工業地域の立地条件は、豊富な地下資源と五大湖の水運による結びつき、そして東部のメガロポリスによる大市场圏や大西洋を超えたヨーロッパ市場が広がっている。</p> <p>●その自動車産業は、ハイウェイ交通が盛んなアメリカの社会生活に大きな意味をもち、またアメリカ経済を支える世界的な産業となっている。ただし近年では、日本や中進国との競争によって下降傾向にある。</p> <p>●新聞などで、日本の自動車産業は最近振るわないと聞いている。</p> <p>●アメリカのように日本も自動車社会となり、郊外型の大規模小売店が近年増えてきている。</p> <p>●田舎では自家用車なくして生活は困難である。</p>	
<p>第4・5時 (発展2) 主体的方法</p>	<p>■以上の学習のもとに、資料から、工場や自動車の排ガスによる酸性雨について、各グループごとに検討し考えよう。</p> <p>◆(価値判断)★<③></p> <p>■アメリカや日本も含めて問題解決のための手だてを検討し考えよう。</p> <p>◆(問題解決)★<③></p> <p>■自分たちの身近な地域や身回りの行動から「大気汚染」や「酸性雨」の問題を捉え、実際にできる具体策を述べ合おう。</p> <p>◆(意志決定) ★<③></p>	<p>T: 複数の資料を各グループごとに配布し考えさせながら意見交換させまとめさせる(8)。</p> <p>P: 考え、意見交換し価値判断し発表する(9)。</p> <p>T: 発問しグループで考えさせる。</p> <p>P: 考えグループで意見交換し解決策を出し合いまとめて発表する(10)。</p> <p>T: 発問しグループで考えさせまとめさせる。</p> <p>P: 考えグループで意見交換し解決策・行動計画をまとめて発表する(11)。</p>	<p>●とくに先進国各地でみられるが発展途上国でも広がっている。</p> <p>●北アメリカでは北東部に広がっている。</p> <p>●北欧諸国では魚が死滅したり、森林が枯れ、建物が風化したりひどい被害となっている。</p> <p>▲原因となるヨーロッパ中部の大気汚染を何とか解消すべきだ。</p> <p>▲美しいドイツの森林が被害にあい、人間の自然との関わりが弱まってしまから問題だ。</p> <p>▲食物連鎖にも関係し、人間生活にも影響するのではないか。</p> <p>▲酸性雨を生み出さない必要があり、工場や自動車の排ガスを少なくする必要がある。</p> <p>▲先進国はもちろん、発展途上国も含め、工業化や自動車社会化を抑える必要がある。</p> <p>▲ヨーロッパ諸国の取り決めのように、世界会議でその問題解決のためのきまりを取り決める。</p> <p>▲先進国が大きな責任をもち、地球温暖化の問題を検討すべきだ。</p> <p>▲有害な排ガスを少なくできる技術開発も必要である。また、技術が発達している国は、技術援助をする。</p> <p>▲被害を被った自然環境の回復に力を注ぐ。</p> <p>▲十分な環境アセスメント、自動車利用を控えるよう働きかける。</p> <p>▲行政体に出向き、空ぶかし、アイドリングはやめるよう働きかける。</p> <p>▲自転車・バス・電車を今まで以上に利用するよう働きかける。</p> <p>▲身近な地域の排ガス・酸性雨・酸性雪を調査する。</p> <p>▲この問題に対する行政体の対策を聞きに出向く。</p> <p>▲実際の行動計画をつくる。</p> <p>▲大気汚染と健康との関係について調べる。</p> <p>▲調査・行動の結果を発表する。</p>	<p>HK1 HK2 HK3 HM H I</p>

資料(1) 主題図「アメリカの鉱工業地域」教科書, p.184. アメリカ合衆国・カナダの工業地域, 『97 地理資料集B』とうほう, 1997, pp.188-189.
(2) ワークシート(Ⅰ). (3) 正井泰夫, 先端をゆく工業国, 『アメリカとカナダの風土』古今書院, 1985, pp.84-88.
総合組立工業としての自動車工業, 『資料地理の研究』帝国書院, 1998, p.214.
(4) 正井泰夫, 発達した道路網, 『アメリカとカナダの風土』古今書院, 1985, pp.88-90.
(5) 合衆国商務省センサス局編, 製造業一州別概要: 1982-1991年, 輸出関連の出荷額と製造業の雇用一州別: 1989年, 『現代アメリカデータ総覧 1994』原書房, 1995, pp.760-762. 矢野恒太記念会編, 自動車の生産, 主要国の自動車生産推移, 自動車の組立台数, 国別、メーカー別の自動車生産, 『世界国勢図録』国勢社, 1999, pp.306-310.
アメリカ国内にある日本の自動車工場, 『99 ビジュアル地理』とうほう, 1999, p.179. (6) (7) ワークシート(Ⅱ).
(8) 酸性雨の分布, 『99 ビジュアル地理』とうほう, 1999, p. 71. 酸性雨, 『97 地理資料集B』とうほう, 1997, p.101.
日本自動車教育振興財団, 『自動車教育資料自動車そして人』実教出版, 1997, pp.42-109.
(9) (10) (11) ワークシート(Ⅲ).

続いて、前節で説明した学習指導システムに基づき、第5図のように構造化された学習内容を、一般資料を付け加えながら、実際に地理的見方・考え方に基づく学習指導計画案を設計した(第2表)。この案では特色ある教育方法の組み入れを避け、まず理解しやすいシンプルなモデルとして提示することにした。授業の流れは以下のとおりとなる。

第1時の導入部では、主題図を用いて、地理的見方を中心に、地誌的方法によって、アメリカ全域についての全般的な地理的事象の位置や分布や地域的特色を地理情報として整理し把握させる。第1時の展開1では、地理的考え方を中心に、先の学習から五大湖周辺の工業立地について推論させ、次に、検証となる資料を用いて、系統的方法によって、アメリカ五大湖南岸工業地域における地域間相互作用・地域変容などについて考えさせ、それらの地理情報の分析と解釈をさせる。

第2時の展開2では、地理的考え方を中心に、系統的方法によって、資料からアメリカの人々の生活と自動車の結びつきや、空間的に広がる世界のアメリカ自動車産業について考えさせ、それらの地理情報の分析と解釈をさせる。

第3時の発展1では、これまでの学習成果となる地理的認識について、それが地理的イメージとしてどのように根付いたか気づかせるために、まず学習成果のまとめを行う。次に、地理的技能の育成のために、生徒のアメリカ五大湖南岸工業地域、自動車に関する環境・地域イメージを顕在化させるために、イラストやイメージ図を描かせ、主観的な部分も含めて発表させる。

第4・5時の発展2では、世界的な環境問題について、地理的事象から得られる社会的意義を価値づけ評価し、合理的に判断・解決できる「公民・市民」のための資質の育成を目指す。そのために、地理的事象の社会的意義を、地理的判断力のキー概念である価値判断、問題解決、意志決定から分析し、さらに地理的見方・考え方のキー概念から構造化した上で内容として用いる。まず、世界におけるアメリカ自動車産業と酸性雨問題との関係を、資料から自動車の排ガスと工業立地から説明し、とくにヨーロッパの酸性雨問題の事例から考えさせ、価値判断をさせる。その結果をグループ・クラスにおいて発表し合い、意見交換する中で再度、社会的な価値判断も加えさせる。次に、それらの価値判断を踏まえて、その問題解決の手だてについて考えさせ、グループ・クラスにおいて発表し合い、意見交換しまとめる。最後に、まとめられた問題解決のための手だてをもとに、自己の態度が社会の在り方に結びつくための具体策について考えさせ、グループ・クラスにおいて発表し合い、意見交換する。とくに身近な生活との関わりに着目させ、具体的な態度や行動に結びつけられるような行動計画を作成させる。

第4節 まとめ

本章の結果は次の5つにまとめられる。

- ①地理学との関連が図られる地理的事象から、地理的見方・考え方の「地理的・・・」を規定し、その地理的事象を構造化した。
- ②地理的見方・考え方の区分による構造化とキー概念の抽出によるその明瞭化を図り、地理的見方・考え方の内部構成と構造化を図った。その構造化に対応する地理的技能、地理的認識、社会的見方・考え方などの関係諸概念を整理し構造化した。
- ③社会的見方・考え方や地理的見方・考え方から構造化される、「社会的判断力」や「地理的判断力」という新たな概念を投入することによって、地理的見方・考え方と、社会認識および公民的資質に理論的な整合性を持たせ、明瞭に構造化した。
- ④以上によって、地理的見方・考え方とその関係諸概念の構造を総合的な観点から独創的に組み合わせ、地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業の改善のための学習指導システム(「地理的見方・考え方のシステム」)を開発した。
- ⑤構造化された地理的見方・考え方や地理的判断力に基づいて教科書の記述内容を分析し、それから学習内容の構造化を行った。さらにその結果に一般資料も加え、設計した学習指導システムに基づきながら学習指導計画案を作成した。

以上から、本章では、地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業のための学習指導システムの開発と、その学習指導計画案を作成することによって、実際の活用事例となるモデルを提示した。

註一第2章一

- 1) ①大森照夫『新社会科教育基本用語辞典』明治図書, 1986, pp.150-153. ②佐島群巳「地理的意識の研究と課題」町田・篠原編『地理教育の内容』明治図書, 1984, pp.7-15. ③山口幸男「わが国における地理意識研究の分類と文献」『新地理』vol.35(4), 1988, pp.33-35.
- 2) 地理学の対象を、ショレーは「われわれをとりまく世界から選び出された事象」、木内は「地表面の諸事象」、西川は「地球表面世界の場所的、地域的多様性」と論じている。ショレー(山本

- 正三・正井泰夫・田中真吾訳)『地理学の方法論的考察』大明堂, 1967, pp.3-17. 木内信蔵『地域概論』東京大学出版会, 1968, pp.23-24. 西川治「地理学の特徴」西川治編『地理学概論』朝倉書店, 1996, pp.3-16.
- 3) 文部省『中学校指導書社会編』大阪書籍, 1989, pp.16-54.
- 4) 文部省『中学校指導書社会編』大阪書籍, 1978, pp.15-60.
- 5) 文部省『中学校指導書社会編』大阪書籍, 1970, pp.36-37.
- 6) 川合元彦『生活の場の見方・考え方ー地理教育演習ー』古今書院, 1986, p.17.
- 7) 中村和郎「地理的見方・考え方を大切にする」『地理』vol.42(1), 1997, pp.43-47.
- 8) 篠原重則「新课程高校地理教育の問題点」『新地理』vol.45(4), 1998, pp.1-16.
- 9) ①前掲 1), 5). ②文部省『中学校学習指導要領解説ー社会編ー』大阪書籍, 1999, pp.21-78.
③滝口昭二「小中高における地理的見方考え方の系統性」『新地理』vol.21(2), 1973, pp.20-32.
- 10) 南楚猛・藤井佳子「合衆国地理教育ガイドラインにみる地理的見方・考え方ーガイドラインに示された初等教育における到達目標の分析を通してー」『新地理』vol.40(2), 1992, pp.49-58.
- 11) 和田文雄・戸井田克己「対論授業をする側からみた地理教育の課題」『地理』vol.43(3), 1998, pp.60-80.
- 12) ①岩田一彦編『地理教科書を活用したわかる授業の創造』明治図書, 1984, pp.11-37. ②菊池利夫編著『高校地理教育の原理と方法』古今書院, 1976b, pp.60-87. ③ C.L.Salter, *Geographic Themes in United States and World History-An Integration of Fundamental Geography into the Basics of the American Curriculum*, Dept of Geography & Center for Academic Interinstitutional Programs, 1987, UCLA (Folding Sheet).
- 13) ①文部省『中学校学習指導要領解説ー社会編ー』大阪書籍, 1999. ②文部省『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』実教出版, 1999.
- 14) 西脇保幸「地理教育における技能の育成」『地理学評論』vol.71, 1998, pp.122-127.
- 15) 前掲 13)①, pp.21-78.
- 16) 内田順文「都市の『風格』についてー場所イメージによる都市の評価の試みー」『地理学評論』vol.59, 1986, pp.276-290.
- 17) 伊東の見解を参考にした(伊東亮三「社会的事象・社会的意味」大森ほか編『新訂社会科教育指導用語辞典』教育出版, 1993, pp.54-55)。
- 18) 朝倉の見解を参考とした(朝倉淳「社会的判断力を育成する小学校社会科の授業構成ー

「私たちの生活とごみ」を事例として－』『社会科学研究』vol.45, 1996, pp.51-60)。

19) 本研究の地理的事象や地理的見方・考え方の構造にスムーズに適合することのできるダウンズの2つの理解タイプを位置づけた(ロジャー・ダウンズ「認知図化－テーマ的分析－」ケビン, R.コックス・レジナルド, G.ゴレッジ(寺阪昭信監訳)『空間と行動論』地人書房, 1986, pp.119-150)。

第3章 地理的技能の育成を重視した社会科地理授業 のための学習指導システムの開発

本章の目的は、前章で開発した地理的見方・考え方を育成する社会科地理授業のための学習指導システム(「地理的見方・考え方の学習指導システム」)を用いて、地理的見方・考え方の育成を中心におきながらも、それを助ける地理的技能の育成を重視した中等社会科地理授業を開発することである。

そのための授業内容については、調べ学習として代表的な野外調査¹⁾を取り上げる。野外調査は、新版(1999)²⁾の中学校地理的分野「身近な地域」や高等学校地理A「身近な地域の国際化の進展」・地理B「市町村規模の地域」の中で主に示されるようになり、井田・藤崎・吉田(1992)³⁾、篠原(2001)⁴⁾の実践研究からも、その重要性が指摘されている。このことから、野外調査は、今日的な意義をもち、地理的技能の育成の有力な学習として意義をもつ。

研究方法は、このような野外調査について、中等社会科地理授業において行うことを想定し、最初に前半の、「地理的見方・考え方の学習指導システム」に基づき、地理的技能の育成を重視した学習指導システムを開発する。そしてその学習指導システムを検証した後に、それに基づいて、理念型としての学習指導計画案の設計を進める。その詳細は次の5つとする。

- ①「地理的見方・考え方の学習指導システム」に、新たに地理的技能に関する詳細な探究過程やその内容を組み込む。これによって、地理的技能の育成を重視した学習指導システムを開発する。
- ②その学習指導システムの有効性について、いくつかの学習指導計画より検証する。
- ③学習内容として「新潟県津南町の電子(部品組立)工業」を学習テーマとして取り上げる⁵⁾。そして、筆者自身の事前の野外調査によって、学習素材となる資料やデータを収集し、分析・考察する。次にその結果を、開発した学習指導システムから分析し、学習内容として構造化を図る。
- ④その構造化された学習内容に、学習指導計画の目標を設定する。そして、授業づくりへの視点を設定する。
- ⑤授業に必要な発問や学習活動を組み込み、学習指導計画案を設計する。

第1節 地理的技能の育成を重視した学習指導システム

1 学習指導システムづくり

「地理的見方・考え方の学習指導システム」の主な特徴は、①地理的見方・考え方を中心におき、地理的技能や地理的認識などの関係諸概念について整理・構造化されていること、②新たな「地理的判断力」概念を投入し、それら関係諸概念を、社会科目標である「社会認識の形成」と「公民的資質の育成」との間に理論的整合性を持たせて構造化されていること、③そこにおける地理的技能は、「地理的見方・考え方および地理的判断力を助ける技術と能力」と規定され、3つの内容構成によって構造化されていること、の3点があげられる。

社会科目標	学習内容					学習成果
	地理的事象	地理的見方・考え方と地理的判断力	地理的技能	3構造	探究過程の段階	
社会認識の形成	地理的事象における諸現象	地理的事象に対する把握のための視点・観点	広がりや時間変化などの比較・関連による把握 ・「空間」 ・「場所」	I 地理情報の収集・整理および把握	1 地理的疑問・研究計画 ↓ 2 調査・収集 ↓ 3 整理・把握	地理的認識 地理的事象を知ろうとすることや推論し理解しようとする、そしてその成果となる知識・理解および能力・技術
	地理的事象における因果関係・概念・法則など	地理的事象に対する理解のための思考・考察する方法	関係や要因や作用やまとまりや変容などの探究 ・「立地」 ・「環境」 ・「地域」	II 地理情報の分析・考察および表現・活用	4 地図・図表などの表現・活用 ↓ 5 分析・考察	
公民的資質の育成	地理的事象に対する社会的意義	地理的事象に対する価値づけや評価するための判断や目的実現のための手段を選択決定する判断能力	地理的見方・考え方の活用、問題の発見や把握、達成すべき目的の設定、実践的態度への接近など ・「問題解決」 ・「価値判断」 ・「意志決定」	III 地理情報の考察結果のまとめ・発表・意見交換	6.まとめ・発表 ↓ 7.意見交換(客観化) ↓ 8.価値形成(実践化)	地理的認識に対する社会的意義を踏まえた社会的判断力

第6図 地理的技能の育成を重視した学習指導システム
—「地理的見方・考え方のシステム」に基づいて—

本研究では、このような前半の「地理的見方・考え方の学習指導システム」での地理的技能の3つの構造のもとで、より詳細な探究過程を求める。そこで、アメリカ・ナショナルカリキュラムの地理的スキルを参考にし、第6図のように、1.~8.の段階で構成される地理的スキルの探究過程を加え、「地理的スキルの育成を重視した学習指導システム」として設定する。

最初に、この第6図の概観について、図中の上段から説明する。(図左端の)社会科目標に対して、(図中央の)学習内容が従属している。そして、この学習内容は、①地理的事象、②地理的見方・考え方と地理的判断力、③地理的スキルの3つに構成され、それらが学習されることによって、(図右端の)学習成果が得られることになる。また、図中上段の項目は、矢印に従って、下方へ学習過程として構造化され、とくに学習内容(①②③)は、3段階に構造化されている。したがって、ここまでは、「地理的見方・考え方の学習指導システム」のしくみと同様である。

次に、その学習指導システムの特徴となる、地理的スキルの探究過程における8つの段階について説明する。

- 1.「地理的疑問・研究計画」段階は、(地理的スキルの)I構造において示されていないが、地理的スキルの探究過程を組み込むにあたって、その探究の出発点となり、動き出すためのスキルとなる。その内容は、多様な地理的事象の中から疑問点を明確にした上で、研究課題を設定することができ、その研究課題に対する適切な手立てを検討し、それに従って合理的な研究計画を作成することができることである。
- 2.「調査・収集」段階は、研究計画に従って地理情報を収集するためのスキルとなる。その内容は、地図を活用しながら、フィールドワークや、文献・統計資料などの情報収集を行うことができることである。また、適切なマナーをもって調査を行うことも含まれる。
- 3.「整理・把握」段階の内容は、収集した地理情報を適切に整理することができ、その地理的事象の内容や意味を把握することができることである。なお素データの簡易な図表化は、この段階に含まれる。またこの段階で不備なデータを発見し、再度前の「調査」段階へフィードバックすることもできる。
- 4.「地図・図表などの表現・活用」段階の内容は、先に整理・把握された地理的事象を、後の分析・考察する視点をもって、多様に地図化・図表化することができ、さらに、その図表を後の分析・考察のために活用することができることである。
- 5.「分析・考察」段階の内容は、前に地図化・図表化した地理情報、そしてその他の地理情報も重ね合わせながら分析・考察することができることである。その結果再度、前の段階へフィードバックし、高度な内容の模式図を作成したり、高度な統計分析の結果を図表化することもでき

る。

- 6.「まとめ・発表」段階の内容は、①先に分析・考察した地理情報を、総合的に検討・考察し、概念や理論に関わる因果関係を導き出し、それに対して評価・説明することができ、②研究課題に対する結果を適切にまとめることができ、③そのまとめをスライド・OHPなどの適切な機材や方法によって発表することができることである。
- 7.「意見交換(客観化)」段階の内容は、①発表により意見交換を行い、まとめに対する再吟味・検討および補充・修正などをすることができ、②この意見交換による客観化によって、研究結果に対する科学性を高められ、それがもつ社会的意義の観点からも検討することができ、③それによって、合理的で多面的な側面から価値判断することができ、④さらに生徒各々が意志決定することができることである。つまり、この段階は、公民的資質の育成に直接的につながる地理的判断力を助ける地理的技能の中心部となる。また、研究の結果次第で、必要に応じて再度前の2.や4.の段階へフィードバックすることもできる。
- 8.探究過程の終わりに位置づく、「価値形成(実践化)」段階の内容は、意見交換によって再検討を経た、まとめに対する生徒各々の意志決定に基づいて、生徒自身の実生活(生活実践)から、それを検証することができ、その結果から新たな地理的疑問を見出し、探究過程の最初に戻り、新たに探究を進めることができることである。

2 「地理的技能の学習指導システム」の検討

—文部省資料中学校社会科学学習指導計画の分析を通して—

ここでは、文部省(1993)⁶⁾の中学校社会科指導資料で提示している2つの授業実践(事例1:「読図や作図などの作業的な学習—関東地方を例として—」、事例2:「写真やビデオなどを活用した作業的な学習—東南アジアを例として—」)に対して、先に開発した「地理的技能の学習指導システム」より分析し、その有効性を検証してみたい。

まず、第3表より、事例1の分析の結果について説明する。第3表には、表の中央から左側にその授業計画が示され、その分析した結果が右端に示されている。その分析の結果は次の3つとなる。

- ①地理的見方・考え方や地理的判断力のキー概念が混在したり偏ったりしない明瞭な授業計画である。
- ②地理的技能の探究過程も明瞭で、段階を踏んだ学習過程となっている。
- ③とくに、第1時限では、「空間」と「場所」が強調され、地理的事象として学習内容が強く意識

されている。また、第8時限目では、「価値判断」が強調され、これまでの学習成果を踏まえた、地理的判断力の育成に時間がとられている。

次に、第4表より、事例2の分析の結果は以下の4つである。

- ①事例1と異なり、地理的見方・考え方や地理的判断力のキー概念が混在し、複雑な思考や考察が要求されている。
- ②地理的見方に関する学習場面では、写真から読みとられる場合が多い。
- ③とくに、地理的考え方に関する内容が厚く、複雑となっている。また、地理的判断力に関する内容があまり顕著とならない。
- ④地理的技能の探究過程の段階も複雑となり、系統的な段階を踏まず、短時間のうちに、単発的に探究過程が進められる傾向がみられる。

第3表 学習指導計画事例1の分析

＜学習テーマ＞「読図や作図などの作業的な学習－関東地方を例として－」			「地理的技能の学習指導システム」による分析		
学習目標	①東京の中心地としての機能や都市問題、東京との結び付きに着目して関東地方をとらえる学習に意欲的に取り組ませ、東京や関東地方への関心を高めさせる。 ②東京や関東地方の人々の生活、産業の特色を、教科書・地図帳等の地図資料に基づいて多面的に考察し、理解させる。 ③教科書・地図帳等の地図資料の読み取りや簡単な地図を描く作業を通して、様々な地図に親しませるとともに、地図資料を活用する能力を育てる。	地理的技能の探究過程の主な段階	地理的見方・考え方や地理的判断力の主なキー概念		
時間	指導内容	目標(要約)	学習活動:丸数字で表示。授業細案のない時限は評価ポイントを提示(★◆■●)		
1	関東地方の自然－白地図作業を通して－	自分なりに工夫して表現する白地図作業に意欲的に取り組ませ、関東地方の自然的条件や行政区分などに関する基礎的な知識を身につけさせる。	①関東地方の自然環境が描かれたVTRを5分程度視聴し、自分なりの関東地方のイメージをつくる。 ②地図帳を見ながら、白地図に描く地名とその位置を確認する。 ③地図帳の関東地方の地図を見ながら、都道府県名や主な都市、地形などの自然の様子を、自分なりにイメージ化し、それらを自分らしく工夫して白地図に表現する。 ④完成した作品を机の上に広げ、その列に沿って一斉に一定の方向にずれていくかたちで移動し、各生徒の作品を見る。そして、お互いの作品を評価し合う。	1. ↓ 3. ↓ 4. ↓ 4.	空間場所

2	<p>様々な機能が集中する東京</p> <p>都心や副都心に集中する様々な施設を地図から読み取る作業に意欲的に取り組み、東京の日本の中心としての様々な機能や役割を理解させる。</p>	<p>★地図から官公庁や大企業の本社、放送局、出版社、大学などの施設の位置や分布の様子を具体的に読み取る作業に意欲を持って取り組む。</p> <p>◆様々な施設の分布などに着目し、東京の中心地としての機能や役割を具体的かつ多面的に考察し、理解する。</p> <p>■都心や副都心の市街地の様子を示した地図から、中心地の機能にかかわる施設を読み取り、それらを分類・整理して都心、副都心の地域的特色を明らかにする資料をつくる。</p>		地域
3	<p>巨大都市 東京の悩み①-通勤圏の拡大とラッシュアワー</p> <p>通勤ラッシュや鉄道交通網の整備に着目し、市街地や通勤圏の拡大に伴って起こる都市問題について考察し、理解させる。</p>	<p>①多摩ニュータウンの写真を見て、なぜ東京郊外の宅地化が進んでいるのかを考え、各自が意見を発表する。</p> <p>②多摩ニュータウンから大手町や霞ヶ関のオフィス街、官庁街までは、どのようなルートで通勤するか、地図帳の鉄道路線図をなぞりながら各自で読み取る。</p> <p>③ラッシュ時の写真を見て、混雑する原因を考え、各自が意見を発表する。</p> <p>④JR線や地下鉄路線図を見て、大手町や霞ヶ関までのルートを確認し、さらに路線図から気付いたことを各自が発表する。</p> <p>⑤職場が多摩ニュータウンにある場合と、都心部まで通勤する場合とでは、どう違うかグループで考え、発表する。</p>	<p>1. ↓</p> <p>3. ↓</p> <p>5. ↓</p> <p>4. ↓</p> <p>5. ↓</p> <p>6. ↓</p>	環境
4	<p>巨大都市 東京の悩み②-ゴミ問題を中心に</p> <p>東京のゴミの量や収集、処理の方法などに着目し、人口や産業が高度に集中する地域で深刻化する都市問題を追究するとともに、快適な住環境について考察させる。</p>	<p>★教室や家庭のゴミの種類や量を調べる活動を手がかりに、ゴミ問題について関心を持ち、東京のゴミ問題を意欲的に追究する。</p> <p>◆ゴミ問題とその背景を追究する学習を通して、様々な都市問題の独自性と共通性について考察する。</p> <p>■ゴミ問題に関する資料を身近な生活と関連づけて読み取り、人口や産業の集中する地域が抱える問題や住環境について理解する。</p>		環境 価値判断 問題解決

5	変貌する 京浜工業 地帯	京浜工業地帯の特色 や変化の様子を、新 旧の業種別の工場分 布図を比較して読み 取らせ、理解させる。	<p>①どこに、どのような工場が密集しているか読み取り、各自が発表する。</p> <p>②重化学工業の工場が多い、川崎を中心とする臨海部と、出版・印刷工業の工場が多い都心部、そして機械工業の工場が多い内陸部の三つに、大きく区分することとし、その区分を各自で考え、記入する。</p> <p>③昭和30年代の工場分布図を見て、どこに、どのような工場が多く分布しているかを読み取り、ノートにまとめる。</p> <p>④2枚の分布図を比較し、京浜工業地帯全体や、区分した三つの地域のそれぞれについて、変化した点と変化していない点を読み取り、グループで話し合い、ノートにまとめる。</p> <p>⑤内陸部に機械工業が増えたことや、都心部の出版・印刷工業はあまり変わらないことなどの変化の特色をまとめ、その原因をグループで話し合う。</p>	2. ↓ 3. ↓ 3. ↓ 4. 5. ↓ 5. 6.	地域
6	大都市と 結び付く 農業	各地の農業の特色と その背景を、巨大な消費地東京との結び付きに着目させて地図等の資料に基づいて考察し、理解させる。	<p>★関東地方の農業の特色を、農業地域区分の図や農業生産のグラフから読み取る学習に意欲的に取り組む。</p> <p>◆■関東各地に特色ある農業がみられることを農業地域区分の図から読み取るとともに、一般図などと関連付けて、その背景や要因について追究し考察する。</p> <p>●関東地方の農業の分布や特色を、大消費地東京との結び付きや自然的条件と関連付けて理解する。</p>		立地
7	関東地方 の行楽地 ・保養地	関東各地の行楽地・保養地の立地やその特色を、都市生活や交通の発達とかかわらせて考察し、理解させる。	<p>★分布図から関東各地の行楽地・保養地の立地に関心を持ち、それらの立地の要因を追究する学習に意欲を待って取り組む。</p> <p>■地図資料から関東各地の行楽地・保養地の分布の特色を読み取り、それらが立地する条件などを一般図や統計、文書資料などと関連付けて追究し、明らかにする。</p> <p>●関東各地の行楽地・保養地の立地やその特色を、東京大都市圏で暮らす人々の生活環境や余暇行動と関連付けて理解する。</p>		立地

8	様々な地域からなる関東地方一単元をまとめる作業的な学習	関東地方やそれを構成する各地域の特色を、地図を入れたポスターに描いて紹介する作業を通して、関東地方の学習成果をまとめるとともに、イメージ豊かにとらえさせる。	①作業の内容や手順についての説明を聞き、内容を理解する。 ②ポスターに表現する地域を選定し、地域の特色を表す標語を考える。 ③選定した地域の地図や標語を、自分なりの表現でポスターに表す。 ④早く完成し、黒板に掲示された作品を見て、見做う点があれば参考にして、さらに工夫する。 ⑤展示されたポスターを見ながら、意見を述べ合い、関東地方で学習したことを確認し合い、まとめる。	6. ↓ 6. ↓ 7. ↓ 7.	価値判断
---	-----------------------------	--	---	-------------------------------------	------

★: 関心・意欲・態度 ◆: 思考・判断 ■: 資料活用の技能・表現 ●: 知識・理解

第4表 学習指導計画事例2の分析

<学習テーマ>「写真やビデオなどを活用した作業的な学習」			「地理的技術の学習指導システム」による分析		
学	①自分たちの東南アジアに対する理解の不十分さや誤解や偏見に関心を持たせ、東南アジアの地域的特色を追究する学習に意欲的に取り組ませる。		分析		
目	②東南アジアの地域的特色を写真やビデオから読み取る学習を通して、画像資料を活用する能力を高めさせる。		地理的技術の探究	地理的見方・考え方	
標	③画像資料等を活用して地域的特色を視覚的かつ多面的にとらえる方法を身に付けさせる。		過程の主な段階	地理的判断力の主なキー概念	
	④東南アジア各国の貿易や日本からの援助の様子を追究する学習を通して、東南アジアの地域的特色を具体的かつ多面的に理解させる。				
時	指導内容	目標(要約)	学習活動: 丸数字で表示。授業細案のない時間は評価ポイントを提示(★◆■●)		
1	貿易から見た東南アジア	1枚の写真から日本企業の進出の様子などを読み取らせ、東南アジア各国の貿易の特色やその背景について考察させる。	①ジャカルタの市街地の地図をじっと見て、写真の中で気付いたことを各自ノートに記録し、その結果を発表する。 ②先生の質問に応じて、改めて写真を見て、写真から様々な事象を読み取る。 ③日本企業の進出の様子や東南アジアの地域的特色など、写真から読み取ったことをまとめる。 ④東南アジア各国の貿易相手国を統計などの各種資料を使って調べ、写真から読み取ったことと関連付けて、その特色や背景を考察し、発表する。 ⑤東南アジアの気候や地形などの自然条件を調べ、貿易の輸出入の品目とのかかわりについて考察し、発表する。	1. ↓ 2. ↓ 3. ↓ 2.3.5.6. ↓ 2.3.5.6.	地域環境

2	東南アジアの稲作と貿易	ビデオの映像からタイの稲作の特色を読み取らせ、日本の稲作との共通点、相違点を考察することにより東南アジアの稲作の特色を理解させる。	<p>①米の生産国のうち、米を輸出している国と輸入している国をそれぞれ上位10か国程度調べる。</p> <p>②東南アジアの稲作地域の分布を地図帳で調べる。</p> <p>③タイの稲作の様子をビデオの映像だけを見て、タイの稲作の様子をじっくりと観察する。</p> <p>④タイと日本の稲作を比較して、両国の共通点や相違点をグループで話し合い、表にまとめる。</p> <p>⑤タイと日本の稲作の相違点の背景について話し合う。</p> <p>⑥1973年と1987年のタイの主な輸出品の資料から輸出品の変化について調べ、その変化について話し合う。</p> <p>⑦バリ島とチャオプラヤ川流域の水田の写真を比較して、共通点や相違点を読み取る。</p> <p>⑧東南アジアの稲作の特色についてわかったことをノートにまとめる。</p>	<p>2.3.</p> <p>↓</p> <p>2.3.</p> <p>2.3.</p> <p>↓</p> <p>5.6.</p> <p>↓</p> <p>5.</p> <p>↓</p> <p>2.3.5.</p> <p>↓</p> <p>5.</p> <p>↓</p> <p>6.</p>	環境
3	東南アジアの熱帯性作物と日本との結び付き	ゴム園のビデオ教材を視聴して、プランテーションで働く人々の様子を調べさせるとともにプランテーション経営の変化について考察させる。	<p>①1965年と1987年のマレーシアの輸出品目の割合の統計を見て、気付いたことを発表する。</p> <p>②マレーシアのゴム園の分布図を見て、読み取ったことを話し合う。</p> <p>③ゴム園に関するビデオを視聴して、ゴム園の様子を観察する。</p> <p>④ビデオを視聴して、気付いたことや疑問点についてグループで話し合い、ノートにまとめる。</p> <p>⑤ゴム園で働く人々の様子からマレーシアで暮らす人々の民族構成について調べる。</p> <p>⑥ゴム園が他の作物を栽培するようになった理由について調べる。</p> <p>⑦1987年のマレーシアの輸出品目割合の統計を見て、機械類の輸出額の割合が高くなっている背景について話し合う。</p> <p>⑧日本の電子産業の海外進出の統計やマレーシアへの工業投資国一覧を見てマレーシアの工業化に日本がどのようにかかわっているのかを調べる。</p> <p>⑨地図帳から東南アジアの熱帯性作物の分布を読み取り、ゴム園の学習成果を生かして、それらの作物生産の様子を予想する。</p> <p>⑩教師の説明を聞き、東南アジアのプランテーションの特色をとらえる。</p>	<p>1.</p> <p>↓</p> <p>2.3.</p> <p>↓</p> <p>2.</p> <p>↓</p> <p>3.</p> <p>↓</p> <p>2.3.</p> <p>↓</p> <p>5.</p> <p>↓</p> <p>4.5.</p> <p>↓</p> <p>2.3.4.5.</p> <p>↓</p> <p>2.3.4.5.</p> <p>↓</p> <p>6.</p>	環境 地域

4	東南アジアの熱帯林と木材輸出	2枚の写真と比較し関連付けて読み取る作業を通して、熱帯林伐採の現状とその課題を考察し、理解させる。	<p>①教科書などに掲載されている伐採され、木材を運び出されている写真を見て、伐採前の熱帯林の様子を予想し、イラストなどで描く。</p> <p>②次に、熱帯林の写真を見て、予想したイメージとの共通点、相違点をノートに書き出し、発表する。</p> <p>③友達の発表や教師の説明を基にして、熱帯林の特色をまとめる。</p> <p>④熱帯林を形成する様々な樹種のいずれもが有用材として利用されているかどうかに着目し、伐採方法を予想する。</p> <p>⑤2枚の写真と比較し、熱帯林伐採の方法やどのような木材が運び出されるのかを写真から読み取る。</p> <p>⑥必要な木だけを切り出して、森林を守るにはどのような伐採の仕方がよいのか、どのようにして熱帯林を保護するのか全員で考える。</p> <p>⑦日本の木材輸入の多さを統計資料で調べるとともに、身の回りの生活用品などを見直し、東南アジアの熱帯林と自分たちの生活とのかかわりについて考える。</p> <p>⑧木材の切り出しのために道路建設が必要なことや熱帯林に住む人々への影響などについても調べる。</p>	<p>1. ↓</p> <p>1. ↓</p> <p>3. ↓</p> <p>5. ↓</p> <p>2.3. ↓</p> <p>5.6.7. ↓</p> <p>2.3.5. 6.7. ↓</p> <p>2.3.4.5. ↓</p>	環境 価値判断 問題解決 意志決定
5	工業化を進める東南アジア	アジア NIES に関するビデオ教材から情報を得てシンガポールの貿易の特色について調べさせるとともに、その背景にある社会的条件に関心を持たせる。	<p>①東南アジア諸国の主な輸出国を比較して、どのような共通点がみられるか話し合う。</p> <p>②東南アジア諸国の中で、輸出総額が最も多く、機械類の輸出の割合が高い国を見つける。</p> <p>③ビデオ教材「アジア NIES」を視聴する。</p> <p>④ビデオ視聴からわかったことをノートにまとめ、自分の予想と比較し、考えを修正したり深めたりする。</p> <p>⑤シンガポールをはじめとするアジア NIES 製品の輸出先を白地図に記入する。</p> <p>⑥東南アジア諸国の工業化の様子についてビデオやこれまでの学習でわかったことをノートにまとめ、発表する。</p>	<p>2. ↓</p> <p>3. ↓</p> <p>2. ↓</p> <p>3.5. ↓</p> <p>4. ↓</p> <p>6. ↓</p>	立地 地域
6	東南アジア諸国への日本の海外援助と課題	日本の海外援助の現状を調べさせ、その背景を考察させることによって、東南アジアの地域的特色をとらえさせる。	<p>★日本は東南アジアに最も多く援助していることを知り、その背景について関心を持って調べる。</p> <p>■統計資料をはじめ各種の資料を活用して、日本の援助の特色や東南アジアの地域的特色を読み取り、ノートにまとめる。</p> <p>●日本の海外援助は東南アジアに最も多いことを東南アジアの地域的特色と関連付けて理解する。</p>	<p>地域</p>	地域

★:関心・意欲・態度 ◆:思考・判断 ■:資料活用の技能・表現 ●:知識・理解

以上の2つの事例の分析の結果から、「地理的技能の学習指導システム」の有効性について、次の4つのことが考えられる。

- ①「地理的見方・考え方の学習指導システム」も同様ではあるが、この学習指導システムにおける地理的見方・考え方や地理的判断力のキー概念から、授業計画における学習内容を明瞭に読みとることができる。
- ②この学習指導システムの特徴となる地理的技能の探究過程の各段階から、授業計画における学習内容を概ね明瞭に読みとることができる。
- ③①と②の有効性をもとにして、2つの事例を分析すると、1時限内において概ね、一通りの地理的技能の探究過程が進められてゆく場合が多い。ただし、6.「まとめ・発表」、7.「意見交換」の十分な学習の練り上げを必要とする場合には、十分な時間が必要となる。つまり、地理的判断力のキー概念に対応する学習内容、あるいは地理的技能の探究過程での7.「意見交換」を十分に行うためには、十分な授業時間の確保が必要となる。このように、この学習指導システムから地理的技能の探究過程の各段階がもつ特徴を把握することによって、授業設計を計画的に進めてゆくことができる。
- ④とくに、事例2では顕著となるが、指導内容(小単元題目)の構成が先行し、その後、系統的になりにくい、地理的見方・考え方や地理的技能の育成に関する内容が複雑にみられる。そこで、この学習指導システムのもとで、地理的見方・考え方、地理的判断力、地理的技能の育成を中心におき、学習内容を構成していけば、より系統的で無駄の少ない、それらの育成のための学習内容の構成ができると考えられる。つまり、この学習指導システムは、そのための合理的な手引きとなることができる。

以上のように、授業設計上、有効性をもつ「地理的技能の学習指導システム」を用いて、次に、学習内容を構成した上で構造化を図り、授業づくりを進めてみたい。

第2節 学習内容の構造化—新潟県津南町の電子工業—

第6図に基づいて、学習内容の構造化を進める手順は、次の5段階とする。

- (1)学習目標を念頭に置き、地理的事象を広く素材として収集・選定する。そのために、筆者は、事前の野外調査を行った⁷⁾。まず、津南町や電子部品組立工業に関する文献・図書資料・地図・統計・新聞資料などを収集した。次に、工場見学、役場・商工会への聞き取り調査、津

南町の電子部品工場経営者に向けたアンケート調査や聞き取り調査などを行った。その結果、得られた資料やデータを分析・考察し、まとめた。

(2) そのまとめられた地理的事象の内容について、地理的見方・考え方や地理的判断力に対応するキー概念から分析する。その結果は以下の①～⑨の内容となる。

①「津南町の位置・広がり」と電子工場」では、津南町の位置、方位、面積などや、津南町の電子工場の位置についての内容となる(キー概念:「空間」)。

②「津南町の地域的特色」では、津南町の自然的条件(地形、気候、河川)と社会的条件の特徴についての内容となる(「場所」)。

③「津南町の電子工業」では、津南町の電子工業に関する、製造品、経年的変化、経営的特徴、労働者の特徴、歴史的背景、企業間のつながり、町行政、住民意識などの特徴についての内容となる(「場所」)。

④「津南町電子工業の立地」では、津南町の電子工業の立地要因に関する、その分布の特徴、自然的・社会的条件、労働者の特徴、歴史的背景などの因果関係についての内容となる(「立地」)。

⑤「電子工業をとりまく環境」では、津南町の電子工業に関する自然環境や社会環境との因果関係についての内容となる(「環境」)。

⑥「電子工業と津南町」では、津南町電子工業の地域性に関する推移、町行政、会社間の階層構造、国内外の産業構造の変化との因果関係についての内容となる(「地域」)。

⑦「津南町電子工業の展開」では、①～⑥の内容から得られる、津南町電子工業の労働力指向型としての歴史的展開や、地域的展開、そして津南町住民の意識における電子工業などに関する価値・評価についての内容となる(「価値判断」)。

⑧「津南町電子工業の活性化」では、国際的分業体制や二重構造などを理解し、津南町の電子工業の活性化に関する方策についての内容となる(「問題解決」)。

⑨「活性化計画の作成」では、①～⑧の内容から津南町電子工業の活性化計画に関する意志決定についての内容となる(「意志決定」)。

(3) このような①～⑨の一連の思考過程を伴う地理的事象(内容)に基づき、先に設定した地理的技能の探究過程を関係づける。そのための具体的な内容については、アメリカ・ナショナルカリキュラムの地理的技能の第9～12学年までの内容と、わが国の高校地理B教科書数社

の内容を参考にした。

(4) 以上によって、本研究が求める学習内容の構成は、第5表のように示すことができる。この表は、筆者の野外調査によって得られた詳細な内容を示すところに力点がおかれているため、第6図に基づきながら、大まかな対応関係から構成された学習内容となる。ここでは、野外調査を学習展開の軸とし、左手に地理的技能の育成内容、右手に地理的見方・考え方と地理的判断力の育成内容が配列され、その各々の内容の対応関係は、罫線の枠組みによって示されている。また授業の流れにおいては、上部が社会認識の形成部(津南町の電子工業)、下部が公民的資質の育成部(その活性化策)と構成されている。

(5) 最後に、その第5表をもとに、さらに各内容の因果関係を重視して構造化された図式が第7図となる。ここでは、大きな枠組みとして、左手に地理的見方、中央に地理的考え方、右手に地理的判断力と位置づけられている。また、その各々の内容(内容記号で表示)間のつながり(因果関係)は、斜線によって詳細に示されている。つまり、このような多様で多くのつながりを示す、いわば「学習指導地図」を頼りに、生徒の多様な学習活動の内容の方向について検討し、あるいは、生徒の主体的な多様な分析・考察に耐えられる授業づくりを図ることになる。また、地理的技能の探究過程の流れについては、図中左上に位置する G1 から進み、最後には右下の G8 に位置付くことになり、そして、G1 ~ G5 までは主に社会認識の形成のために、G6 ~ G8 までは主に公民的資質の育成のために各々位置づくことになる。

第5表 学習内容の構成－津南町の電子工業－

展 開	地理的技能	内 容	地理の見方・考え方と地理的判断力	内 容
	生徒に求めたい地理的技能の内容		教師が事前に準備・想定しておく学習内容	
	■: 地理的技能の3構造	記	■: キー概念に対応する地理的事象(内容)	記
	文字枠: 地理的技能の探究過程の細目	号	文字枠: 各内容の題目	号
テ マ 事 前 調 査 現 地 調 査	<p>■地理情報の収集・整理・把握</p> <p>1. 地理的疑問・研究計画</p> <p>○テーマ設定理由、研究対象地域の選定、研究計画の検討。</p> <p>2. 調査</p> <p>○調査計画(調査時期・調査対象・調査項目・交通手段・携行品・訪問先工場への依頼・アンケート調査票などの郵送・聞き取り相手の選定・聞き取り時のマナー・質問項目の順序のあり方・記録のつけ方などの事前作業・検討・計画)</p> <p>○2万5千分・5千分の1地図による調査</p> <p>○役場より町全般の統計資料や電子工業に関する資料調査、図書館より町史資料、電子工業関係の文献調査、インターネット検索調査。</p> <p>○役場や商工会への聞き取り調査</p> <p>○地図を用いて、位置確認と工場周辺のフィールドワーク(ノートや地図への書きとめ)、数件の工場への見学と聞き取り調査</p> <p>3. 整理・把握</p> <p>○入手資料の整理、パソコンによるワープロ・表計算ソフトの活用、分布図と基礎統計の作成</p>	<p>G1</p> <p>G2a</p> <p>G2b</p> <p>G2c</p> <p>G2d</p> <p>G2e</p> <p>G3</p>	<p>■空間① 津南町の位置・広がり電子工場</p> <p>○津南町の位置・方位・面積。</p> <p>○長野県との県境、新潟県中魚沼地方、周辺町村との配置関係。</p> <p>○津南町の電子工場の位置。</p> <p>■場所 ② 津南町の地域的特色</p> <p>○世界的な豪雪地帯、大規模な河岸段丘地形、魚沼丘陵・東頸城山地・信濃川・中津川。</p> <p>○農業や土木業中心の産業構成(魚沼産コシヒカリ・除雪作業)、観光産業(温泉・スキー)。</p> <p>○過疎化と高齢化(若年労働者流出)、村落社会。</p> <p>③ 津南町の電子工業</p> <p>○津南町電子工場の製造品・経年的変化・経営的特徴・労働者の特徴(増産増益傾向)。</p> <p>○家内副業の歴史と既婚女性中心の働き場。</p> <p>○労働力指向型工業の特徴となる一般的な内陸下請工業の特徴、親会社や本社との関係(下請工場)、国際的分業体制における製造、海外競争における製造。</p> <p>○電子工業と町行政・住民意識との関係(繊維工業から電子工業、情報産業へ)。</p>	<p>MA1</p> <p>MA2</p> <p>MA3</p> <p>MB1</p> <p>MB2</p> <p>MB3</p> <p>MB4</p> <p>MB5</p> <p>MB6</p> <p>MB7</p>

<p>■地理情報の分析・解釈・表現・活用</p>	<p>■立地 ④ 津南町電子工業の立地</p>
<p>調査 4.地図・図表などの表現・活用</p>	<p>○役場周辺での立地要因は、交通の利便性や</p>
<p>5.分析・考察</p>	<p>人口集中地によって労働力を確保しやすい点</p>
<p>結果 ○ A.グラフを作成し、繊維業を中心に零</p>	<p>にある。 KA1</p>
<p>果の進出していることを理解し、その電</p>	<p>○自然的・社会的条件から立地要因をみると、 KA2</p>
<p>分子工業がバブル経済崩壊の影響をうま</p>	<p>地形的・気候的な閉鎖性、ホコリが少なく、空気</p>
<p>析乗り越えていることも理解する(ア)。</p>	<p>がきれいで乾燥しないことから、電子製造に有利。</p>
<p>・ ○ B.主題図を作成し、電子工業の多くが、</p>	<p>○労働力指向型工業の特徴となる、低賃金労働</p>
<p>考察 役場周辺に立地しており、町の中心部お</p>	<p>と安価な地代、町在住の既婚女性を中心とし</p>
<p>よび道路交通上の好都合な場所に立地し</p>	<p>た労働力がみられる。 KA3</p>
<p>ていることを理解する(イ)。</p>	<p>○事業主の人的つながりによる立地として、 KA4</p>
<p>○ C.表を作成し、全ての会社は繊維・織</p>	<p>親会社経営者と親戚、親からの引継がみられ、</p>
<p>物不況後に開業し、そしてほとんどの電子</p>	<p>採算がとれる範囲での立地であること。 KA5</p>
<p>工業は、下請け会社となっている。また</p>	<p>○出機・家内副業→繊維工業→電子工業や情報</p>
<p>従業員の構成では、女性社員が数多く、そ</p>	<p>報産業というように変容している。</p>
<p>れが労働力指向型工業の特徴であることを</p>	<p>■環境 ⑤ 電子工業をとりまく環境</p>
<p>を理解する。以前の兼業農家の既婚女性</p>	<p>○交通の整備や除雪の充実によって、製品輸</p>
<p>の働き場としての意味合いも理解する</p>	<p>送に雪害がほとんど関係なくなっている。 KB1</p>
<p>(イ)。</p>	<p>○地域的閉鎖性から既存の労働力が他地域に</p>
<p>○ D.表を作成し、複数の会社の経営状況</p>	<p>逃げにくく、低賃金労働が可能となりやすい。 KB2</p>
<p>を比較し理解する。従業員数・資本金・製</p>	<p>○冬場を耐え抜く、豪雪地帯の人々の辛抱強い</p>
<p>品納入先・材料仕入れ先・生産体制・内職</p>	<p>気質との関係から、長時間におよぶ、細やかな</p>
<p>者・労働者の年齢構成や前職歴・居住地</p>	<p>単純作業である電子工業には適する。 KB3</p>
<p>などについて理解する(ウ)。</p>	<p>○機械化が進む今日の社会であっても、労働</p>
<p>○ E.表を作成し、会社経営者の考えを理</p>	<p>者自身の手で組み立て、検査する作業現場が</p>
<p>解する。そこでは、開業の動機・現在の問</p>	<p>ある。一方で数億円する精密にICなどを自動的</p>
<p>題点・雇用状況・経営方針・海外との関係</p>	<p>に製造する作業現場もあり、人間と機械の分業</p>
<p>などを理解する(ウ)。また、製造工程や従</p>	<p>がみられる。 KB4</p>
<p>業員の作業の様子を理解する(エ)。</p>	<p>○町住民の産業に対する意識は、農業や観</p>
<p>○ F.グラフを作成し、住民の農業を中心と</p>	<p>光、情報に強く期待している。津南町には電子</p>
<p>考える津南町の中の電子工業へ対する意</p>	<p>工場が数社しかなく、関わる従業者数も少ない</p>
<p>識を理解する(オ)。</p>	<p>ことから、電子工業には意識が注がれにくい。 KB5</p>
<p></p>	<p>町の土地利用や景観のほとんどが農業であり、</p>
<p></p>	<p>スキー産業が盛んであることによって、その意</p>
<p></p>	<p>識が弱い。</p>

<p>○津南町の地理的な自然的・社会的環境について理解する(カ)。</p>	G5a	<p>■地域 ⑥ 電子工業と津南町</p>	
<p>○内陸下請工業や労働力指向型工業の特徴を理解し、津南町も太平洋ベルトに対して内陸部の農村地域であることから、津南町の電子工業が労働力指向型工業であることを理解する(キ)。</p>	G5b	<p>○1980年代、津南町の繊維工業は不況を向かえ、その解決策を近隣市や民間との協力関係の充実による克服したいと計画している。1990年代では、若者の定住化・製造業誘致・農村地域の工業用地化・知的産業の誘致に乗り出し、繊維工業から、電子工業へ大きく移り</p>	KC1
<p>○十日町織物の出機が盛んであった津南町は、その後下請織物工場が多く立地した時期もあり、その今日の電子工業との関係を理解する(ク)。</p>	G5c	<p>変わっている。1995年では、バブル経済崩壊の対策について、企業誘致・情報交換・異業種交流などを進め、労働環境の整備、勤労者の福利厚生が重視されている。今日、津南町の</p>	
<p>○戦後の高度経済成長期に織物業が盛んとなったが、オイルショック後繊維・織物不況となり、見通しが立たなくなった地域経済を理解する(ケ)。繊維・織物不況の克服のための若者の定着化・製造業誘致・農村地域の工業用地化・知的産業の誘致などの計画を理解する(コ)。</p>	G5d	<p>電子工業は、国内経済の安定成長から今日に至るまで出荷額は急増し、主要な産業になりつつある。</p> <p>○津南町の電子工業の1社を除き、ほとんどが下請工場である。ただし、外注子会社をもつ会社が2社あり、階層構造をなしている。また親会社は周辺の市や東京にある。</p>	KC2
<p>○繊維・織物業から電子工業に産業が移ってきていることを理解する(ア)。</p>	G5e	<p>○近年では海外競争が激化している。部品の調達や出荷などには国際分業体制が一般的。流動的な製品や高付加価値商品などに対して国内生産のメリット生かした生産体制をとっている。</p>	KC3

調 査 の 分 析 考 察 結 果 の ま と め と 考 察 を 展	<p>■地理情報の考察結果のまとめ・発表 ・意見交換</p>		<p>■価値判断 ⑦ 津南町電子工業の展開</p>	
	<p>6.まとめ・発表</p>		<p>○労働力指向型工業としての歴史的展開</p>	HK1
	<p>○研究成果のまとめ図式の作成。</p>	G6a	<p>○津南町電子工業の地域的展開</p>	HK2
	<p>○画像資料も入れた報告書や発表資料作成。</p>	G6b	<p>○津南町住民の意識の中での電子工業</p>	HK3
	<p>○発表の仕方・発表。</p>	G6c	<p><発展的課題>津南町電子工業の活性化</p>	
	<p>7.意見交換</p>		<p>■問題解決 ⑧ 津南町電子工業の活性化</p>	
	<p>○意見交換・再検討・再調査・再考察。</p>	G7a	<p>○製品開発のための高度な知識・技術力の修得。</p>	HM1
	<p>○社会人とのインタビューや意見交換 (町長・商工会・教育長)。</p>	G7b	<p>○高付加価値製品や先進製品、ブランドの開発。</p>	HM2
	<p>○再度、意見交換・再検討・再調査・再 と考察。</p>	G7c	<p>○国内生産のメリットを生かした需要・注文に る迅速で確実な生産。</p>	HM3
	<p>○最終まとめとして、報告書へ「活性化 計画」を追加公表する。</p>	G7d	<p>○情報化社会に応じた情報関連産業への参入(携 帯電話・インターネットなど)。</p>	HM4
<p>8.価値形成</p>		<p>○従業員の質的向上及び地域教育の充実。</p>	HM5	
<p>○活性化計画に基づいた自らの意志決定 を、以後の生活実践や他学習から学習成果 を検討でき新たな地理的疑問を生み出せ る。</p>	G8	<p>○資本力ある大企業の工場誘致(津南町出身関 係者のネットワークづくり)。</p>	HM6	
		<p>○自然環境の保全や農業とのバランスを図る。</p>	HM7	
		<p>○農業や観光中心の住民意識との共存。</p>	HM8	
		<p>■意志決定 ⑨ 活性化計画の作成</p>		
		<p>○報告書を作成し、町役場や各電子工場へ提言</p>	HI	

※ア～コの記号は地理的技能的分析・考察などのために必要となる資料(下に列挙)。

下線部アルファベットは図表作成部分(下に【 】で表示)。

ア.津南町『工業統計』1965-1997. 津南新聞「1980年代後半の津南町企業進出」1989. 6. 1.

【A. 折れ線グラフ:津南町における労働力指向型工業の統計推移(事業所数・従業者数・製造品出荷額)】

イ.津南町資料,「企業誘致一覧2000」。地図資料・フィールドワーク記録。

【B. 主題図:津南町電子工業の立地】、【C. 表:津南町電子工業各社の概要】

ウ.アンケート調査票(工業)・聞き取り調査・聞き取り追調査

【D. 表:津南町電子工業各社(A～E)の特徴】、【E. 表:津南町電子工業A社・B社の経営】

エ.各製造行程における写真資料

オ.新潟県立津南高等学校郷土研究部資料,「津南町住民の意識」

【F. 円グラフ:津南町住民の産業意識】

カ.津南町『津南町要覧』・『津南町統計資料』1999.

キ.芦刈孝編『最新地理小辞典三訂版』二宮書店, 1997.

赤羽孝之「長野県上伊那地方における電子部品工業の地域構造」『地理学評論』vol.48(4), 1975,
pp.275-296.

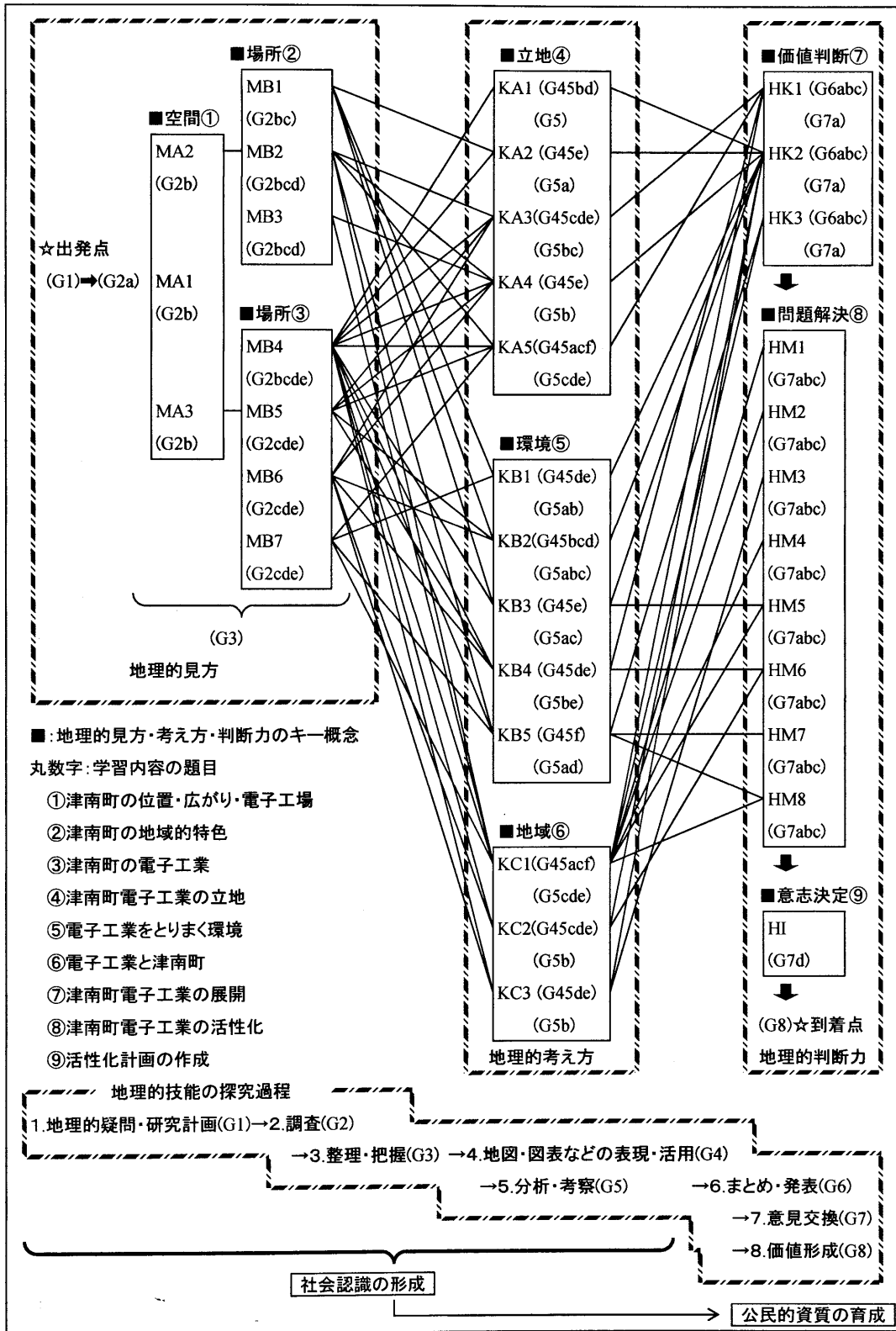
赤羽孝之「長野県南佐久地方における電気機器工業の地域構造」『地理学評論』vol.53(8), 1980,
pp.493-510.

ク.市川健夫『雪国地理誌』銀河書房, 1975, pp.130-131.

青野壽郎・尾留川正平編『日本地誌第9巻中部地方総論・新潟県』二宮書店, 1972, pp.386-387.

ケ.津南町史編纂委員会編『津南町史資料編下巻』第一法規, 1984, pp.648-654.

コ.津南町『津南町総合振興計画』1980-1995.



第7図 学習内容の構造化－津南町の電子工業－

第3節 授業づくりー中等社会科地理授業ー

1 学習目標と授業づくりへの視点

以上のように構造化された学習内容に基づき、本研究が求める学習指導計画の目標について、次のように設定する。「野外調査を行うことによって、津南町における電子部品組立工業について理解させる。それを踏まえて、地域住民の立場から津南町電子工業の活性化プランを作成させる。このような学習を通して、地理的見方・考え方や地理的判断力に基づく、地理的技能を育成する」。

ところで、澁澤(1998)⁹⁾は、中学校の「身近な地域」を取り上げ、その改善の方向について、「確認・理解型の地域調査から、問題追究・問題解決型の地域調査への転換」を提案している。この改善方向は、高校段階でも同様に考えられ、中等社会科地理授業の課題として受け止められる。本研究では、この課題を受け入れ、生徒の主体的な野外調査を通して問題を追究していく学習場面をもつ授業づくりを進める。具体的には、まず、野外調査の手引きとなる工場見学を通して、主に確認・理解型の野外調査を行い、次に、その工業見学によって新たに発見した課題を追究する、問題追究型の野外調査を行う。つまり、2段構えの野外調査によって授業展開を図ることとする。ただし、課題を追究する場合には、より発展的な解決へと向かうための生徒間の意見交換が重要となる。そこで、そのためにグループで意見交換を積極的に行う、主体的な学習場面を多く組み入れることにする。

2 学習指導計画案

これまでに構造化された学習内容に基づいて、学習目標を設定し、検討された授業づくりへの視点を組み込んだ、理念型としての学習指導計画案は、第6表のとおりとなる。

この案が位置づく、単元構成(1～5)については、表中の上部において示されている。ここでは、地域スケールに応じた学習が意図され、「工業」を通じて、世界→市町村規模→都道府県→国家→州へと展開されていくものとして設定されている。また、この案の学習目標には、本研究が重視する地理的技能の探究過程とその具体的な内容が示されている。

その授業の流れは以下の(1)～(5)のとおりとなる。

(1)導入部・展開1(第1時)

①前時の工業立地に関する学習内容を再確認させた上で、津南町の地理的特徴と電子部品

工場のスライドを見せ、学習テーマへの接近を図る。

- ②授業者によって、学習テーマが設定され、グループごとにどのような事柄について、どのような方法を用いて調べてみるのか、検討させ考えさせる。
- ③各グループで意見交換し合った内容について発表し、それを授業者が整理しながら、調査の項目や方法をクラス全体でまとめておく。
- ④クラスでN社へ工場見学に行くことを告げ、授業者が提示する関係資料から、その工場の概要について説明し、再度、グループで、このN社に対する調査項目、質問項目を検討させる。その際に、選定された調査内容を推論させておく。また、授業者は、各グループの質問事項が重複しないように留意しておく。
- ⑤事前に、フィールドワーク時のマナーや方法などについて授業者が説明し、確認させておく。

(2) 展開2(第2～4時)

- ①工業見学では、グループごとに観察や質疑応答を行い、得られた記録や回答について、後の分析・考察のために整理し、確認・理解させておく。そこで、授業者は、事前調査から想定できる、主な質疑応答例を予め用意し、実際の質疑応答場面の行方の見通しを立てておく(第7表がその事例となる)。また見学後、生徒に体験的な感想を記述させておく。例えば「精密な部分は高価な機械が素早く行い、人間の感覚が必要となる検査や、大型部品のはめ込みなどは人間が行い、合理的に役割分担がなされている」など、既存の地理的認識やイメージの変容を自己認識させ、後の主体的な野外調査への興味・関心を促す。
- ②見学後、グループごとに調査前の推論とその調査結果を対比させ、認識を深めさせる。そして調査結果について考察させる。そこで、さらに疑問点を見つけ出させ、新たな課題を追究するための調査計画について考えさせる。
- ③これまでの検討・考察をもとにグループごとに、新たに別工場へ主体的な野外調査を行なわせ、各々のグループがもつ研究課題を追究させてゆく。授業者は、必要があれば、調査・考察上の助言を与え、場合によっては文献調査、役場聞き取り調査なども勧める。
- ④生徒は訪問先に連絡を取り、調査に出かける。調査中は、グループの主体性に任せ、生徒の自由な発想・意欲・関心を尊重する。なお、授業者は随時、調査上の相談に応じる。調査後、その結果を、調査前の推論と対比させ、認識を深めさせる。そして、調査から得られた資料やデータは、次の段階の分析や考察のために、簡単に整理し、まとめさせておく。

(3)展開3(第5～6時)

以上による調査結果を十分に分析・考察させる。そのために、パソコンなどを用いて図表を作成させ、さらにそれを活用し、考察させる。その際に、授業者は、予め第7図(斜線によるつながり)をもとに、各内容の因果関係について留意しておき、生徒に対して適切な助言を与えられるように備えておく。また、必要に応じて再調査させる。

(4)まとめ(第7～8時)

グループごとにまとめた研究成果について報告書を作成させ、ポスター発表させる。そしてその各発表に対する評価を教師も含め、クラス全員で行う。さらに授業者は、クラス全体の発表を通じて、各発表内容の関連について考えさせ、津南町電子工業の歴史的展開、地域的展開、および津南町住民の意識の中での電子工業、という3つの観点からまとめあげる。

(5)発展(第9時～10時)

- ①以上の学習成果を踏まえ、発展学習テーマへの接近を図るために、授業者が用意したワークシートに従って、津南町電子工業に対する評価をクラス全員で行う。
- ②発展学習テーマ「津南町電子工業の活性化について」を設定し、グループごとにその解決策について、これまでの学習成果を踏まえ、意見交換させながら検討させ、推論させる。
- ③その結果から、各生徒は、考えられた方策について、校外の社会人に対してインタビューを行い、地域社会の客観的な評価となる意見を調査する。例えば、家族、地域住民などの多様な立場の社会人から意見を得られるように勧める。
- ④その評価内容について、再度グループで意見交換させ、最終的なまとめとして、ポスター発表させる。そして再度、その各発表に対する評価を、授業者も含めクラス全員で行う。
- ⑤これまでの学習成果を報告書としてまとめ、それを町役場、公民館などへもっていき、地域社会の産業に対する高校生の提言として公表する。

以上の計画における全授業時間は10となる。ただし、工場見学の時間は別として、グループでの作業や野外調査の時間は除かれる。そのため、この計画案では、夏休み・放課後・土日などの時間をそれに割り当てた、断続的な授業展開を想定している。

第6表 学習指導計画案「津南町の電子工業」

<中等社会科地理授業において想定する単元構成>: 中単元 「世界の工業地域」(全25~28時間)				
			<単元の展開>	<地域スケール>
			↓	↓
・単元1「工業の発達と工業立地」(4時間).....前時「工業立地」.....(全世界)				
・単元2「身近な地域の工業地域～新潟県 津南町の電子部品工業の事例～」(10時間)..... 本研究の学習指導計画案 ... (市町村規模)				
・単元3「信越地方における内陸下請工業の展開 ～新潟県と長野県の場合」(8時間).....わが国の信越地方への展開.....(都道府県)				
・単元4「アメリカの工業地域の形成～五大湖南岸 工業地域の事例～」(5時間).....世界の諸地域への展開1.....(国家)				
・単元5「ASEAN諸国の工業地域の形成と変貌」(6時間).....世界の諸地域への展開2.....(州小区分)				
<単元3～5の中から2つ選択する>				
<学習テーマ> :「津南町の電子(部品組立)工業について」・「津南町電子工業の活性化について」				
<学習目標> : 野外調査を通して、津南町における電子部品組立工業について理解し、それを踏まえて、 地域住民の立場から津南町電子工業の活性化プランを作成する。このような学習を通して地理的見方・考 え方や地理的判断力に基づく地理的技能を育成する。				
学習段階	授業者による指示・発問	学習活動(丸数字:資料)	●地理的技能の主な到達目標 ◇既存の知識	内容 記号
第1時 <導入> テーマの設定へ	○労働力指向型工業はどのような特徴か。 ○これらの写真はどこか、どのような場所の写真か。次はこの工場 の写真か。 ○これらの工場で何を 作っている写真か。	T:発問し、考えさせる。 P:答える。 T:発問し、考えさせる。 ① P:考え、答える。 T:発問し、考えさせる。 P:考え、答える。	◇低廉・大量労働力に依存する割合 が高い。衣料・電子部品組立工業が 好例。 ◇津南町の河岸段丘・町中心部・冬 期の写真。工場は町中心部。 ◇電子回路をはめ込み、精密な部品 を組み立てている。電子部品工場 である。	G1

<p><展開1> 学習テーマの設定</p>	<p>◎学習テーマ 「津南町の電子(部品組立)工業について」</p>	<p>T: 前時からの流れを確認させ、テーマを設定する。 P: 確認し、学習テーマを認識する。</p>	<p>●労働力指向型工業の学習を踏まえて、津南町の電子工業がどのようなのか疑問を抱き、その疑問点を明確にしながら研究課題の設定へと結びつけられる。</p>	<p>G1</p>
<p>調査計画</p>	<p>○調査したい事柄についてグループで考えよう。またどのような方法で調べてみるのか考えよう。 ○以上の検討を基に、クラスでN社の工場見学を行う。そのための調査項目を再検討しよう。</p>	<p>T: 発問し、考えさせる。 ② P: 考え、答える。グループで意見交換しまとめ合う。その結果を発表する。 T: 基本資料を用意し、発問し、考えさせる。③ P: 考え、グループ内で意見交換しまとめる。④</p>	<p>●調査項目として、電子工業の歴史・社長の経営方針・従業員数・生産高・立地場所・工場の設備・町住民の意識などの調査項目を考え出すことができる。 ●調査方法として、地図・文献資料調査、聞き取り調査、アンケート、見学などの方法を考え出すことができる。 ●野外調査でのマナーや記録のつけかたを十分に理解できる。</p>	<p>G2a</p>
<p>第2～4時</p>	<p>○クラスで工場見学に行き、工場内を観察しよう。そこでグループ代表から会社社長に質問してみよう。 「確認理解型の野外調査」 ○質疑応答の内容について意見交換をしながら整理しまとめておこう。 ○グループごとにまとめた地理情報を考察してみよう。 ↓ 主体的な野外調査 「課題追究型の野外調査」 ○各グループごとに主体的に他の工場調査を行い、課題を追究しよう。そして工場見学の結果と合わせて整理しまとめよう。調査上の相談には応じます。また役場や図書館などに行って聞き取り調査や文献調査を加えてみよう。</p>	<p>T: 工業見学をさせ、質疑応答をさせる。 P: 得られた調査結果をグループで把握し合う。 T: 発問し、考えさせる。 P: 考え、意見交換し、まとめ、確認・理解する。 T: 発問し、考えさせる。 P: 考え、意見交換しながら、新たな課題を見出す。 T: 指示を出す。 P: グループで主体的に調査を行い、課題を追究していく。必要に応じて教師に相談する。調査後、工場見学の際の結果も加えて、適切に調査結果を、グループで意見交換しながらまとめる。</p>	<p>●適切なマナーをもって、工場見学や質疑応答ができる。 ●質疑応答から質問事項を理解し把握することができる。 ●工場見学による調査結果を適切にまとめ、確認・理解できる。 ●まとめた地理情報を適切に考察することができる。そして、発展的に新たな課題を見出せる。 ●各グループの主体的な野外調査のために、調査項目や調査方法、そして調査の日程やグループメンバーの役割分担なども含めた調査計画を作ることができる。 ●調査計画に基づいて調査を行い、課題を追究していくことができる。 ●調査結果をまとめられ、素データを簡易図表にできる。またまとめ段階で不備があれば、再調査できる。</p>	<p>MB1-7 G2eG3 KA1-5 KB1-5 KC1-3 G5 abcde MA1-3 MB1-7 G2 abcde G3</p>

<p>第5～6時 〈展開3〉 分析・考察</p>	<p>○各グループでまとめたデータを分析・考察してみよう。その際に、主題図・グラフ・表・図式などを作成し、さらに深く検討・考察を加えてみよう。また、必要に応じて再調査も行ってみよう。</p>	<p>T: 考え、図表にて表現させ、分析・考察させる。 ⑤ P: 考え、グループで意見交換しながら分析・考察する。そしてパソコンなどを使用し、多様に図表を作成する。また必要に応じて再調査を行う。</p>	<p>●後の分析や考察を念頭に置き、得られたデータからの確に多様な図表を作成することができる。 ●作成された図表について、さらに新たな資料を照らし、深く分析・考察することができる。 ●必要に応じて、再調査を通して、再分析・考察することができる。</p>	<p>KA1-5 KB1-5 KC1-3 G45 abcdef G5 abcde</p>
<p>第7～8時 〈まとめ〉 まとめと発表</p>	<p>○グループで研究成果の報告書を作成し、さらにポスターにてまとめて発表してみよう。 ○各発表に対する評価や意見などをワークシートに記してみよう。 ○各発表の関連について考えてみよう。</p>	<p>T: 発問し、作業させる。 ⑥ P: グループで意見交換しまとめ、報告書やポスターを作成し、発表する。 T: 発問し、考えさせる。 ⑦ P: 考え、評価する。 T: 発問し、考えさせる。 P: 考え、発表する。</p>	<p>●グループでの協同作業が十分にでき、考察結果を的確にまとめられる。 ●適切な発表機材を使い、明確に発表することができる。 ●科学的・客観的な評価ができる。 ●意見交換より、再調査や再考察など修正・補充を行うことができる。 ●各発表内容を関連づけることを通して、考察をより深めることができる。</p>	<p>HK1-3 G6abc G7a</p>

第9～10 時 <発展> 発展学習 テーマの 設定 意見交換 活性化ブ ランづく り	○以上から、地域住民とし て津南町電子工業をどの ように評価するか、考えて みよう。 ◎発展学習テーマ 「津南町電子工業の活性 化について」 ○地域住民として津南町 電子工業の活性化策につ いて考えてみよう。 ○各グループで考えた解 決策を、多くの社会人に聞 いてみよう。 ○最終まとめとして、津南 町電子工業の活性化プラ ンをポスターにてまとめて みよう。 ○作成した各プランに対す る評価や意見を考えよう。 ○各プランを報告書にし て、学校や役場などにて公 表してみよう。	T:発問し、ワークシートから 考えさせる。⑥ P:意見交換しながら考え、ま とめ・発表する。 T:これまでの流れから発展 学習テーマを設定し、その活 性化策を考えさせる。 P:考え、意見交換し、まとめ 発表する。 T:発問し、調査させる。 P:生徒各自が調査し、グル ープにて検討する。 T:発問し、作業させる。 P:グループで意見交換しな がらまとめを作成する。 T:発問し、考えさせる。⑦ P:考え、評価する。 T:発問し、作業させる。⑨ P:グループで協力し、作成す る。	●これまでの学習に基づき、意見交換を 行い、より科学的な価値判断や評価から まとめ・発表することができる。また、以 上のことから、津南町電子工業の問題点 を発見することができる。 ●これまでの学習成果を十分に踏まえた 上で、地域住民の一員として津南町の産 業の将来に向けた、具体的な解決策につ いて積極的に考えることができる。 ●生徒各自が、学校外の多様な社会人 に対して、聞き取り調査を積極的に行うこと ができる。 ●合理的な価値判断によって、公民的資 質を担う意思決定ができる。 ●適切に研究成果をポスターにて発表す ることができる。 ●各プランに対して科学的・客観的な評 価ができる。 ●これまでの学習成果を、以後の生活実 践や他の学習から検討でき、新たな地理 的疑問を生み出すことができる。	HM1-8 G7a G7b G7c HI G7d G7e G8
---	---	--	---	--

《資料(丸数字)の凡例》

- ①写真資料「津南町の河岸段丘」・「津南町の農業」・「津南町の市街地」・「津南町の電子工場周辺」
・「N社の工場製造工程」・「N社従業員の作業の様子」、②ワークシート「調査項目と方法」、
③資料「N社の概要」、④資料「フィールドワークの仕方と工場見学」、
⑤ワークシート「地理情報の分析・考察・表現・活用」、⑥資料「報告書作成の仕方」、
⑦ワークシート「発表評価」、⑧ワークシート「津南町電子工業の活性化の解決策」、⑨資料「報告書作成について」。

第7表 工業調査の際の質疑応答例

質問内容	応答内容
①会社をはじめたきっかけは何でしょうか。また、会社をはじめて良かったことは何でしょうか。そして、会社を建てるためにいくらぐらいかかりましたか。	○20年前、繊維不況でそれまでやっていた十日町織物の下請けがなくなったため、燃系の経営者が、繊維業をやめて、地域の女性のほたるくところを地元につくるために開始した。500万円から今は2300万が資本金額である。当初の目的をはたし、町全体の雇用場を提供できたことが良かった。もともとの燃系工場を利用しての建物ほとんど費用がかかっていません。
②会社の歴史を簡単に教えてください。	○20年前に、繊維業からはじめて、需要のある仕事をやっていた。今の仕事をはじめたきっかけは、M社のテレビの部品をつかったこと。それからテレビ、プリンター、扇風機、洗濯機などの部品をつくりはじめる。今は、モニターなどの部品もつくっている。以前は、輸出製品と国内への製品は半々だったが、今はほとんどが国内への製品になった。輸出して海外と競争するのは厳しいから。今は、大手メーカーが海外で部品を作る時代でその部品を国内で調達し、組み立てる場合が多いのではないかと。
③現在抱えている問題点は何でしょうか。	○日本のメーカーが国内で物をつくる必要がなくなるので海外進出がさらにすすむ。海外製品の圧迫。
④将来的にこの会社をどのように発展させていきたいか、また、やりがいはありますか。	○1人1人の顔がわかる人数(今は50人)を維持していきたい。やりがいは十分にあります。仕事は大変ではないと考えている。
⑤雪が降ると困ることは何でしょうか。	○特に困ることはなく、道路除雪が充実しほとんど支障がありません。
⑥設備投資はどうなっていますか。	○去年の10月に1回、今年の8月に1つ機械が入る。買い取りで定価は1億円。借り入れの設備投資はしない。この高額な機械は、3交代制で一日中稼働している。
⑦電子工業全体の様子を教えてください。	○携帯、パソコン、ゲームがすごい。これからどうなるか想像できない。
⑧どうして女性社員が多いのですか。雇うならどんな人に働いてもらいたいですか。	○女性の方が根気がある。明るく、積極的な人。また、高齢の方で、昨年、60～70才の人が数人働いていた。
⑨従業員はどこから通勤していますか。	○津南からが9割弱、中里村・十日町市から1割。
⑩製造での機械化の問題点は何でしょうか。	○基本的に同じ。機械が全部やるわけではない。
⑪作るものの種類は、どれくらいの時間的な間隔で変化しますか。	○1ヶ月から、長いもので3ヶ月くらい。特に携帯電話関係のものはサイクルが速い。
⑫一日の生産量はどのようでしょうか。	○モニター1000個、ただし、同じものは、3ヶ月ももたない。昔は、3ヶ月続くものはヒット商品で長いものは2年続く。

第4節 まとめ

本章の結果は次の4つである。

- (1)「地理的見方・考え方の学習指導システム」をもとに、アメリカ・ナショナルカリキュラムの地理的技能を参考にし、新たに地理的技能に関する詳細な探究過程を組み込み、地理的技能の育成を重視した社会科地理授業のための学習指導システム(「地理的技能の学習指導シ

テム」を開発した(第6図)。

(2)その「地理的技能の学習指導システム」を、事例となる2つの授業計画案から分析し(第3表・第4表)、その有効性を検証した。

(3)「新潟県津南町の電子工業」を学習テーマとして取り上げ、筆者自身による野外調査から得られた地理的事象を、地理的見方・考え方と地理的判断力のキー概念より分析した。そして、これによって得られた内容を、「地理的技能の学習指導システム」に従って、学習内容として構造化を図った(第5表・第7図)。

(4)構造化された学習内容に基づいて、学習目標を設定し、検討された授業づくりへの視点を組み込み、本研究が求める理念型としての学習指導計画案を設計した(第6表)。

以上から、本研究では、地理的技能に関する理論的な論点を踏まえて、学習指導領域まで見通した、地理的技能の育成を重視した社会科地理授業のための学習指導計画案を作成した。

註一 第3章一

- 1)本研究での野外調査は、校内での学習活動とつながる観察・見学・調査などの意味とする。
- 2)①文部省『中学校学習指導要領解説—社会編—』大阪書籍, 1999, pp.44-49. ②文部省『高等学校学習指導要領解説—地理歴史編—』実教出版, 1999, pp.173-175, 215-218.
- 3)井田仁康・藤崎顕孝・吉田剛「初等教員養成学部における身近な地域の野外調査に関する指導—上越教育大学の場合—」『新地理』vol.40(2), 1992, pp.36-48.
- 4)篠原重則『地理野外調査のすすめ—小・中・高・大学の実践をとおして—』古今書院, 2001.
- 5)学習テーマの設定理由は、この地域での授業を念頭に置き、この地域において印象の薄い電子工業を敢えて取り上げることによって、主体的な学習活動が促せると考えたからである。
- 6)文部省『文部省中学校社会指導資料、作業的、体験的な学習の充実—社会科における学習指導の工夫と評価—』慶応通信, 1993.
- 7)調査は1999年3月～2000年3月に断続的に行った。
- 8)澁澤文隆「『身近な地域』を生かした日本の諸地域学習の授業改善」『社会科教育研究』No.80, 1998, pp.9-20.